

『注意』「は」第二類の助詞であるから、「こそ」と同じく、強めるのがおもな仕事であつて、主語につくとは限らない。

いつもとは相手の様子が違つてゐる。

右のやうになゞ強めるだけで「いつも」といふ意。補語を強めたのである。又客語につく「は」もあるから、文の意味を考へて誤つてはならぬ。季節とか年月時間についたのは、副修語を強める「は」である。丙三(1)(2)を見よ』

- 三、或人此畫は應舉の筆なりといへり。
- 四、前車の覆るは後車の戒なり。
- 五、覺悟ある人は、何事に當りても怖れず。
- 六、水は方圓の器に従ひ、人は善惡の友による。
- 七、天氣清朗なれども波高し。
- 八、君子は行を以て言ひ、小人は舌を以て言ふ。
- 九、品行が正しいけれど學問はない。
- 十、豹死して皮を留め、人死して名を留む。

## 第七章 文の成分

**二一五** 主語述語は文の大事な成分で之を主要成分といひ、客語補語を補充成分といひ、修飾語を修飾成分といふ。普通の文はこれだけの成分で事が足るのである。

**二一六** 同成分の語が二つある場合。

- 一、執權義時は弟時房と長男泰時とを召す。
- 二、日本一の名山富士山に登る。
- 三、人つく牛をば角をきれ。
- 四、一枝を折る者は 一指を剪らん。
- 五、不忍の池詩人之を小西湖といふ。
- 六、大日本帝國は 萬世一系の天皇 之を統治す。
- 七、五畝の宅 之に植うるに桑を以てす。

右の——と——とは同成分の語である。一の執權は主語で義時も主語であつて同成分である。弟と時房とも同成分で客語である。長男も客語で泰時も客語である。二の日本一の名山と富士山と同成分



とともに補語である。これ等は成分が同じであるばかりでなく、全然一致してゐる。執權即ち義時日本一の名山なる富士山である。かく全部一致關係にある同成分では、上の方を同格語といふ。

二一七 右の三の「牛をば」は客語「角を」も客語で同成分である。四も同じく二つとも客語である。「牛の角をきれ」「一枝を折る者。一指を斬らん」といふのを、上を強める爲に、成分を變化させて、下と同じ成分に言ひ、更に下に副へて説いたのである。上と下とは全部一部の關係をなしてゐることは敘述句に似てゐる。そこで上を普通成分の客語とし、下を副説語又は副格語の客語とする。副へて説いたといふ意味である。

二一八 五の「不忍の池」を主語と誤認してはならぬ。下の「之を」と同成分で、共に客語である。六の「大日本帝國は」も主語と思つてはならぬ。下の「之を」と同成分である。

この兩者の關係は代名詞といふ形式語で、代表させて自分の居るべき地位に置いて、自分は強めの必要上、前衛に進出したので、之を提示格語といふ、五六ともに提示語の客語、七は「五畝の宅」が提示格語の補語である。

右の同格語・副格語・提示格語を文の特殊成分といふ。

二一九 呼掛語 感動語 接続語。

少納言よ香爐峯の雪はいかならん。

あはれことしの秋もいぬめり。

春は來た。しかし花はまだ咲かない。

普通成分—主語・述語・客語・補語・修飾語  
形修語  
副修語

特殊成分—同格語・副格語・提示格語・呼掛語・感動語・接続語

次の文につき、——をつけたる語の成分を示せ。

- 一、鳥は吾れ能く其高く飛ぶことを知る。
- 二、執行の期日は地方長官之を定む。
- 三、相模の守時頼の母は松下禪尼とぞ申しける。
- 四、子等 五人に願ち與ふ。
- 五、彼は頭腦頗る明晰なり。



### 第八章 成分の省略と倒置

二三〇 文は簡潔又は強調の必要上、明瞭と確實とを缺かない範囲に於て或る成分を省略することがある。

#### 一、主語の省略

いつお歸りですか。(あなたは)  
十日にかへります。(私は)  
人を相手にせず、天を相手にせよ。(人々は)  
樹木を愛しませう。(皆さん)

#### 二、述語の省略

福は内(にあれ) 鬼は外。(にでよ)  
人の噂も七十五日。(ただ)

長者の萬燈より貧者の一燈。(まされり)  
一寸の蟲にも五分の魂。(あり)

#### 三、客語・補語の省略

神よ願はくは(われを)助けたまへ。  
僕も(そのことを)知らなかつた。  
その話(僕に)聽かせてくれ給へ。

文の正しい位置は、主語・客語・補語・述語といふ順である。そして修飾語は被修飾語の上に位する。特殊成分は同格語・提示語・呼掛語・感動語は上に副格語は下に、接續語は語・句・文の間にあるのが普通である。ところが特に意義を強めたり、語調を整へる等の必要上、正しい位置が變る。これを倒置とす。

美なるかな 山河のかため  
何だ それは  
來れりく わが好敵手



これ等は述語が主語の上に置かれた例である。

雲のいづこに<sup>二</sup>月<sup>一</sup>やどるらん<sup>三</sup>

御注文の品を<sup>二</sup>私が<sup>一</sup>持つて参りました<sup>三</sup>

これ等は補語・客語が主語の上に置かれた例である。

謂ふ勿れ<sup>二</sup>今日學ばずとも來日ありと<sup>一</sup>

思ひきや<sup>二</sup>雪ふみわけて君を見んとは<sup>一</sup>

これらは補語が述語の下に置かれた例である。

この方が<sup>一</sup>お母さんですか<sup>三</sup>あなた<sup>二</sup>

形修語に係る語の下に置かれた例である。

聲ふり上げて<sup>二</sup>鳴けや<sup>一</sup>鶯

すゝめ<sup>二</sup>ものども<sup>一</sup>

呼掛語が下に置かれた例である。

早く行かう<sup>二</sup>さあ<sup>一</sup>

萬事休す<sup>一</sup>あゝ

これ等は感動語の下に置かれた例である。

次の文の省略されてゐる成分を補へ。

一、風吹く日を選ばむ。

二、我國は森林多く朝鮮は少し。

三、文學の嗜ことに深し。

四、起きては食ひ醒めては飲む。

五、心身ともにいたく衰へたり。

六、雪の降る夜に尋ね行けり。

七、旅は道づれ世はなさけ。

八、忠臣は孝子の門より出づといふ。

九、つねに心平ならざるを憂ふ。

一〇、滿れば缺け奢れば減ぶ。



### 第九章 文の性質上の分類

二二一 文はその性質上から敘述文・疑問文・命令文・感動文の四種に分けることが出来る。

敘述文 事實をありのまゝに敘述する文で、文の最も普通な形である。この種の文には、肯定を表すもの、否定を表すもの、推量を表すものとある。

疑問文 自ら疑ひ、又は人に問ひ或は反語の意を表す文をいふ。

我が思ふ人は、ありやなしや。

榮枯は夢か、幻か。

かしこに立てる人は、誰ぞ、

ふたゝびとだにべき春かは。

命令文 命令禁止をあらはした文である。被命令者と命令者との直接交渉であるから、この文では主語を省くのが普通である。

感動文 願望・欲求の強烈な叫や、其他諸種の感動をあらはした文で、最も力ある發表である。そして感動詞又は感動助詞や「なり」「けり」といふ詠歎の助動詞があるので、すぐわかる。他の文よ

りも對話・獨語等の場合に多い。

老いず死なすの薬もが。

あつばれの武者ぶりよな。

あな恐ろしの物語や。

これ等は主語を具へてゐない。成分の省略といふよりも寧ろ成分の完備しないのが本體である。又准感動文とも云ふべき次のやうなものがある。

すく／＼と生ひ立つ麥に腹すりて燕飛びくる春の山畑

かういふ和歌は述語を省いたところに妙味がある。乙四(11)を見よ。



同音異義の語

- 一 (イ) 櫻花散らば散ら<sup>1</sup>なん。  
願望の助詞。未然形につく。
- (ロ) いざ櫻われも散り<sup>1</sup>なん。  
連用形につく。未來完了の助動詞。
- (ハ) 花の散るなん誠<sup>1</sup>にをしき。  
係の助詞結は連體形。
- 二 (イ) 雨霽れ<sup>1</sup>なば散步せん。  
現在完了の未然形。
- (ロ) 花の色は移りにけり<sup>1</sup>な。  
詠歎の助詞。

- (ハ) 主なしとて春<sup>1</sup>な忘れそ。  
禁止の助詞上にある場合。
- (ニ) この堤に上る<sup>1</sup>な。  
同上終にある場合。
- 三 (イ) 雪深くつもり<sup>1</sup>にければ、道も知れざるに、足<sup>2</sup>に任せて、ゆき<sup>3</sup>にゆく。  
(ロ) 夜もあけたるに何とて速かに起き出で<sup>6</sup>ざる。
- (ハ) 山の絶頂に達せざるに、足は早くも蹇へ<sup>9</sup>にけり。  
1 完了助動詞の連用形。2 接續助詞。活用言につく。「ノニ」の意。3 名詞につく標準を示す第三格の助詞。4 同一の動詞の間に挟りて意味をつよめる一種の慣用語。「百八十五」を見よ。5 「ノニ」2と同じい。6 副詞の語尾。7 名詞につく「に」場所を示す。
- 8 接續助詞(2と同じ) 9 完了の助動詞の連用形。
- 四 (イ) 今日行かすば約束を守らぬ<sup>1</sup>になりぬ<sup>2</sup>べしとて雨をおかして出でゆきぬ<sup>3</sup>。  
(ロ) 來ぬ<sup>4</sup>人を待つ。
- 1 打消の助動詞連體形「ナイ」下に名詞を省く。2 完了の助動詞終止形。強めの意。3 完



了の助動詞終止形。4 1に同じい。

- 五 (イ) 烈しと聞きし嵐の音。過去の助動詞「き」の連體形。  
 (ロ) 頃しも彌生半の春の空。強めの助詞。間投的用法。  
 (ハ) さることなきにしもあらず。同上。
- 六 (イ) 人は武士。特に分けて強め示す助詞。(第二類)  
 (ロ) かくるゝまでもかへり見しはや (咏歎の助詞)
- 七 (イ) わが日本は。 第二格(領格)の助詞。一音の人代名詞につく慣例。  
 (ロ) 烏が鳴く。 第一格(主格)の助詞。
- (ハ) 心の限りつとめけるが、遂に失敗に歸しぬ。接續助詞。活用言につく。「ノニ」の意。  
 (ニ) そこともいはぬ旅寝してしが。願望を表す助詞。
- 八 (イ) 春の花、秋の紅葉といく度か……第二格(領格)の助詞。名詞と名詞をつなぐ。  
 (ロ) あかでも月の傾きにけり。第一格(主格)の助詞。  
 (ハ) 彼れの人に對する態度は……句の中の主語を示す助詞。  
 (ニ) なんのかのと不平ばかりいふ。口語語を重ねる格助詞。

- 九 (イ) 何くれといどむ毎に勝ちたるぞうれしきや。 咏歎の助詞。  
 (ロ) かく徒らに老い果てんとは思ひかけきや。 反語の助詞。  
 (ハ) 知らず、さる例、古にありきや否や。 問の助詞
- (ニ) 僕ところの庭には松や杉や梅がある。 重ねる助詞。
- 十 (イ) 死ぬれば ナ變已然形の語尾。  
 (ロ) 死ぬれば 完了の助動詞の已然形。
- 十一 (イ) 人にして鳥に如かざるべけんや。 熟語の助詞。  
 (ロ) 花盛にして人出多し。 形容動詞の中止の敘述に助詞「して」のついたもの。  
 (ハ) 義家の弟にして頼義の子なり。 指定の助動詞「なり」の中止の敘述に助詞「して」のついたもの。
- (ニ) 人を馬鹿にして嘲笑す。「し」は動詞サ變連用形。他は助詞。
- 十二 (イ) 車でかへる。 名詞につく助詞。  
 (ロ) 顔は鬼で心は佛。 指定の助動詞中止の敘述。
- 十三 (イ) 咲きて散る。 接續助詞。(第三類)



- (ロ) 咲きてけり。完了の助動詞。
- (イ) 書かであらん。活用言の未然形につく打消の助詞。「ナイデ」の意。「百五十七」を見よ。
- (ロ) 書くであらう。名詞につく助詞上に「コト」を省く。
- (イ) 汝は知らざりしか。過去助動詞「き」の連體形に問の助詞「か」のついたもの。
- (ロ) 昨日こそ早苗とりしか。過去助動詞「き」の已然形。
- (イ) 彼も言はねば、我も語らず。否定の助動詞「ず」の已然形。
- (ロ) 早く読みぬ。完了の助動詞「ぬ」の命令形。
- (イ) 彼は我が校の庭球選手たり。指定の助動詞。
- (ロ) 船は港に入りたり。完了の助動詞。
- (ハ) 見渡す限り海水漫々たり。形容動詞の語尾。
- (イ) 風も身にしむ頃となりぬ。動詞。
- (ロ) 彼は我が友なり。指定の助動詞。
- (ハ) 鶯の聲聞ゆなり。咏歎の助動詞。

- (ニ) 海上は今日も波靜かなり。形容動詞の語尾。
  - (イ) 再び歸り來べき都ならねばとて、一門の邸宅を悉く一炬の煙となしはてぬ。打消助動詞の已然形「ナイカラ」。
  - (ロ) 早く行きぬ。完了助動詞の命令形。
  - (イ) いきとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。強めの助詞。
  - (ロ) 剛毅の徳を備へておはしけり。動詞連用形の語尾。
  - (ハ) 自若としてその座を守りたまひきとぞ、内の人の物語りし。過去助動詞の連體形。
- 『註 十九の(ロ)「早く行きぬ」の「ぬ」は、古く願望の助詞として未然形に用いた用法である。例へば「申さぬ」「率ておはせぬ」「榮えいませぬ」「一五七」「一四頁」の表の未然形の欄を見よ。それがいつのまにか連用形に接するやうに變つて、終に語法廢合の結果、完了の助動詞の命令形に入れられて了つたのである。』



附録 二

接頭語・接尾語

九品詞以外に接頭語・接尾語といふのがある。これは語を構成するもので、接頭語を加へたもの、接尾語を加へたものを一語として品詞を示せばよい。

副詞 名詞 助詞 名詞 助動詞 同上 同上  
今日 清子さんが お見え になり ました。乙一(9)

接尾語

接頭語

註 接頭語も接尾語も意味が退化して了つて殆ど残つてゐないものもあるから、語といふのは不適當で接頭語、接尾語と云ふことにしたい。

左に一通り述べて置く。

接頭語の職能は 一、敬語 二、數 三、添意 四、語調 五、語勢である。

一、敬語の役目を果す接頭語

(イ) 口語

お 一宅 一ことづて 一かきなさる  
ご 一親類 一近所 一相談 一縁談

おみ一足 一帯 (これは用法が限られてゐる)

(ロ) 文語

おほ(大) 一君  
み (御) 一位  
おほみ(大御) 一世 (以上上古語)  
おほん 一時 (音便發生以後、中古語)  
おん(御) 一姿 (「おほん」の略。略すると敬意が減ずる。)  
お (御) 一もの (「おん」の略。中古以後今日まで用ゐられる。)  
ご (御) 一料地 (字音 同上)  
ぎよ(御) 一製 (字音文語として現に用ゐられてゐる)

二、數を示す接頭語

文語(口語には用ゐられない。文語を混じた口語文にある。)

た (多) 一年  
しよ (諸) 一國



もろ (諸) 一 双  
しゆう(衆) 一 人

三、添意の接頭辭 敬語や數を示すのも添意であるが、便宜引抜いて別にし、其他の或意味を添へるものを一括して示す。

き (純粹) 一 酒 一 絲  
こ (小又少) 一 山 一 ぶり  
おほ (大又多) 一 雨 一 ぶり  
ま (誠) まつ白 まん圓 (促音又は鼻音に唱へる)  
うひ (初) 一 孫  
はつ (初) 一 雪 一 舞臺  
ふ・ぶ(不) 一 取締 一 男  
む・ぶ(無) 一 分別 一 遠慮  
す (素) 一 足 一 謠

以上「まつ」「まん」の外は文語にも用ゐる。

ま (誠) 一 心 一 東 一 白  
を (小又少) 一 舟 一 暗し  
にひ (新) 一 島守 一 参り

以上は主として文語に用ゐる。これら一例を示したまでで、なほこの外にもある。

四、語調を整へる接頭辭

さ さ夜 さ蕨 さ牡鹿 さ山田 さ渡る さ走る さ迷ふ (名詞と動詞とに)  
み み吉野 み熊野 み山 み空 み雪 み坂 み崎 (名詞に)  
を を簾 を國 を野 を山田 を筑波 (名詞に)  
け け劣る け壓さる け長し けうとし (用言に)  
い に向ふ に行く に通ふ 渡る (動詞に)  
た たなびく た走る た易し ゆたのたゆたに  
か か弱し か細し か寄りあふ  
そ そだたく そなる

五、語勢を強める接頭辭



うち うち見る うち聞く うち切る うち渡る  
 おし おし通す おし立てる おし返す おし廣む  
 さし さしだす さしつかふ さしうつむく さし控ふ  
 かき かき暮す かきくもる かき拂ふ  
 ひき ひきつぐ ひきうける ひきめくる  
 とり とりまく とり締る とりあつかふ  
 たち たちかへる たち別る たちのく たちよる  
 もて もてあつかふ もて惱む

以上主として文語に用ゐられる。勿論口語にも用ゐられるものもある。口語では次の音の関係から促音鼻音になることがある。

ぶち ぶち殺す 又ぶち倒す ぶんなぐる  
 とり とつ締める  
 ひき ひつ拂ふ  
 かき かつさらふ

### 概括

接頭辭の職能

敬語を表す  
 數を示す  
 接尾辭と共通……………  
 或意味を添へる。副助詞に似てゐる……………  
 修飾語の簡易なもの

(以上は語の意味の半ば退化したもの)

接尾辭の職能

一、敬語 二、數 三、添意 四、品詞に資格を與へる。

### 一、敬語を表す接尾辭

(イ) 口語

どの(殿) 部長—  
 どん 政—  
 さま(様) 宮—  
 さん 正夫—



くん 岡田一

せんせい(先生) 林一

(ロ) 文 語

きみ(君) 兄一

うへ(上) 父一

ご(御) 母一

し・うち(氏) 林一

この外 殿様 先生 くん(君)は文語にもつかふ。

二、数を示す接尾辭

(イ) 口 語

がた(尊敬の意をも含む)

奥様がた 宮様がた

たち(親愛の意をも含む)

わたしたち 生徒たち

ら (複数を示す)

子供ら 小僧ら

ども(同上・随つて謙遜又は輕蔑の意を生ず)

私ども 車夫ども

(ロ) 文 語

たち 公達 親達

ばら 殿原 法師原

ら 少女等 爺等おやな

ども 珍しき木ども 息子ども

『註一、「ども」は文語では右のやうに人以外にも用ゐるが、口語では人につけることに限られた。

註二、「など」は助詞に入れる説がよい。動詞形容詞其他の語の下につくこともある。

負けるなどといふことがあるものか。

珍しいなどと吹聴してゐる。

どれも知らないなどと答へた。

見たことがないかなどと怪しいことばかりいふ。』

數詞のうちに用ゐられた接尾辭は

紙 一まい 本 二くわん 太刀 一こし

人 六にん 馬 十頭 帶 一すぢ



家 十二けん 屏風 六さう 洋服 二ちやく

舊い文法書に助數詞といつてあるのは、この接尾辭のことである。

### 三、添意の接尾辭

仲間の意を表し又は輕蔑の意を示す。

どうし・どし(口語) 子供どうし 女どし

どち(文語)

男どち

め(文語・口語)

馬鹿め

### 四、資格を與へる接尾辭

(イ) 名詞の資格を與へるもの

重み 深さ 眠け 寒け 山べ ゆくへ ありか 控へめ やりて

(ロ) 動詞の資格を與へるもの

時めく 時めかす 上品ぶる 田舎びる 氣色だつ 黄ばむ 音なふ うれしがる  
年寄じみる 花やぐ 神さぶ にぎはふ

(ハ) 形容詞の資格を與へるもの

子供らし 人がまし めでたし はるけし らうがはし

(ニ) 副詞の資格を與へるもの

うれしけ 面白さう 清ら つばらか まめやか かごか 夜すがら  
人ごと 歩きながら 吹くから 過ぎがて 五枚づゝ



後  
篇  
問  
題  
解  
說



### (甲) 昭和六年度入試問題の解説

(一) 左の文の中に傍線を付けて主語及び述語を示し且文の構成上何文に属するかを示せ。 東高師

彼は何時もとは相手の様子が違つてゐることに氣付いた。

主語

形容詞句

述語

彼は 何時もとは

相手の様子が 違つてゐる

ことに 氣付いた

主語

述語

句を含む故に複文とする。前篇「二〇九」「二一二」を見よ。

(二) 左の和歌の中にある形容詞・動詞及び助動詞の活用表を作れ。 同上  
月見れば末の代までもしのばれて見ぬ古のいとどゆかしき。

見れ	ミ	見れ	ミ
しのば	バ。	しのば	バ。
レ	レ。	レ	レ。
ル	ル	ル	ル
ルル	ルル	ルレ	ルレ
レ	レ	レ	レ



ゆかしき	ぬ
シク	ズ
シク	ズ
シ	ズ
シキ	ヌ
シケレ	ネ
○	○

(三) 左表の動詞につき文語活用形を平假名にて口語活用形を片假名にて記入せよ。

(廣高師)

動詞	植		得		報		率
	口語	文語	口語	文語	口語	文語	
未(將)然	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	
連用	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	
終止	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	
連體	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	
已然	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	
命令	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	

榮		
口語	文語	口語
エ	エ	キ
エ	エ	キ
エル	ユ	キル
エル	ユル	キル
エレ	ユレ	キレ
エ	エ	キ

(四) 左ノ文ニ於テ動詞・形容詞・助動詞ヲ指摘シ其ノ活用種類及ビ活用形ノ名稱ヲ記セ。

(東女高師)

但シ助動詞ノ活用ハ動詞・形容詞ニ準ジテ記シ、之ニ準ジガタキハ〔特別〕ト記スベシ。

例 おほしき事 いはぬ は 腹ふくるる わざ なり

(甲) 心なき 身にもあはれは 知られ けり 鳴 たつ 澤の秋の夕暮

(乙) 雉子も 鳴かず ば 打たれ まい



(五) 左ノ文ニ於テ——ヲツケタル成分ハ文章法上ヨリ見テ如何ナル役目ヲナスカ。

同上

例 なほ 空しき 地は 多く 造れる 家は 少し

副修 形修 主語 述語 形修 主語 述語

(副修は副詞的修飾語の略、形修は形容的修飾語の略)

(丙) 慾深き 人は 其の 心 いつも 貧しく 慾なき 人は 其の心常に富めり

形修 形修 副修 述語 形修

(丁) 竹子さん あんたは よく まあ そんなに早く 起きられますね

呼掛語 主語 副修 感動語

(六) 次ノ文ニ就キテ左ニ答ヘヨ。(奈良女高師)

貌を正すは心を正すことなり。氣高く美しき姿勢をとれる時は心自ら氣高く美しくなるべし。貌を亂し姿を崩す時は心も自ら亂れ来る。古人が禮を重んじたるはこの理を知り居たればなりき。

(一) 活用アル語ヲヌキ出シ

(2) 活用ノ種類

(3) 活用形ノ種類 (4) ソレニ對スル口語

ヲ記セ。

(七) 文中ノ主語述語ヲ指摘セヨ。

同上

正す	動詞	四段活	連體形	タダス
なり	助動詞	ラ變	終止形	デアル
氣高く	形容詞	久活	連用形	ケダカクテ
美しき	形容詞	志久活	連體形	ウツクシイ
とれ	動詞	四段	已然形	トツ
る	助動詞	ラ變	連體形	テキル
美しく	形容詞	志久治	連用形	ウツクシク
なる	動詞	四段	終止形	ナル
べし	助動詞	久活	終止形	デアラウ
亂し	動詞	四段	連用形	ミダシ
崩す	動詞	四段	連體形	クズス
亂れ	動詞	下二段	連用形	ミダレ



来る	動詞	四段	終止形	クル
重んじ	動詞	サ變	連用形	オモンジ
たる	助動詞	ラ變	連體形	タ
知り	動詞	四段	連用形	シツテ
居	動詞	上一段	連用形	キ
たれ	助動詞	ラ變	已然形	タカラ
なり	助動詞	ラ變	連用形	デアツ
き	助動詞	特別	終止形	タ

貌を正すは 心を正す事なり。心自ら氣高く 美しくなるべし 心も自ら亂れ来る。

古人が禮を重んじたるは この理を知り居たればなりき。

(八) 左の文章の中にて傍線を施せる部分の動詞と助動詞との連続及び助動詞相互の連續を次に示せる例に倣ひて記せ。

(山形高校)

動詞 助動詞 助動詞 助動詞  
 四段活用 完了 推量  
 連用形 終止形 終止形  
 例 読み ぬ らむ

小松の内府が平氏のおとろへ行くをみんなよりはとて はやくこの世さりてんとねがひきとかい  
 たれども (中略) うすき心とやいふべからん (中略) あやまちをすくひていさめとどめつべき  
 を (下略)

動詞 助動詞 助動詞 助動詞	動詞 助動詞 助動詞 助動詞	動詞 助動詞 助動詞 助動詞	動詞 助動詞 助動詞 助動詞
四段 完了 終止	四段 完了 終止	四段 過去 終止	四段 過去 終止
連用 未然 終止	連用 未然 終止	連用 過去 終止	連用 過去 終止
たり	て	ん	ねがひ
き	かい	たれ	
いふ	べから	ん	すくひ
いさめ	とどめ	つ	べき

(九) 左ノ文ノ各語ニ傍線ヲ施シテ其ノ品詞ヲ記シ、且ツ活用語ハ次ノ表ニ其ノ活用ヲ記入セヨ。

(富山高校)

いぬる	動	安元三年	か	とよ	あ	ら	き	風	吹	き	静	か	なら	ざ	り	し	夜	遠	に	火	出	で	ぬ。	
	名		助	助	形	名	動	形	動	助	助	名	副	名	動	助								



活用語	活用						
	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	用
いぬる	イナ	イニ	イヌ	イヌル	イヌレ	イネ	
あらき	アラク	アラク	アラシ	アラキ	アラケレ	○	
吹き	フカ	フキ	フク	フク	フケ	フケ	
静かなら	ナラ	ナリ	ナリ	ナル	ナレ	ナレ	
ざり	ザラ	ザリ	ザリ	ザル	ザレ	ザレ	
し	○	○	キ	シ	シカ	○	
出で	イデ	イデ	イヅ	イヅル	イヅレ	イデ	
ぬ	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ	

(東京高校)

(一〇) (イ)左ノ語ノ活用表ヲ作レ。

老ゆ 似る 爲<sup>ス</sup> 樂し ず

(一一) (ロ)左ノ文ノ施線ノ部ヲ文法上ヨリ説明セヨ。

(同上)

彼は一喝して賊を走らせたり

陛下には大演習に臨ませ給へり

(一二) (ハ)左ノ文ノ施線ノ語ノ品詞ハ何カ。

(同上)

家を思ひ且國を憂ふ

君の行ふところ或は君をあやまらむ

天然の美は更に人工の美よりもすぐれたり

(イ)

老ゆ	オイ	オイ	オユ	オユル	オユレ	オイ
似る	ニ	ニ	ニル	ニル	ニレ	ニ
爲 <sup>ス</sup>	セ	シ	ス	スレ	スレ	セ
樂し	シク	シク	シ	シキ	シケレ	○
ず	ズ	ズ	ズ	ヌ	ネ	○

(ロ)



走らせたり 使役の助動詞  
臨ませ給へり 敬語の助動詞

(八)

家を思ひ且國を憂ふ。接續詞上の連語と下のとをつなぐ。  
君の行ふところ或は君をあやまらむ 副詞  
右の「或は」は「君をあやまらむ」を修飾してゐるのである。  
天然の美は更に人工の美よりもすぐれたり 副詞  
右の「更に」は「すぐれたり」を修飾してゐるのである。

『註 二木の松の樹があつて、その間に綱を引張つたとする。その綱は接續詞である。一本の松の樹があつて、それに蟬がたかつてゐるとする。その蟬が副詞である。修飾するといふのは、或意味を添加することによつとしたら「一層」といふ意を添へたのである。接續詞の方は

山又山を越え行く  
筆或は鉛筆にて書け

のやうに語をつなぐこともある。又連語や句や文をつなぐこともあるが、大體相當重みのあるものと他のもの

のとをつなぐので、松の樹の蟬とか、肩の瘤とかいふやうな添へものでない。しかしそれが軽い場合は副詞で根本的に異つてゐるのではない。文全體にかゝる副詞は接續詞に似てゐるのである。』

(二三) 左ノ文中傍線ヲ引キタル活用連語ニ就キ、助動詞ヲ摘出シ、ソノアラユル活用形ヲ擧ゲ、且コノ文ニ於テ如何ナル活用形ガ用キラレテキルカ、又如何ナル意味ニ用キラレテキルカ、答ヘヨ。  
(府立東京高校)

道路は足底の廣さだにあらば(一)歩むべしといふは理のみなり いかで(二)歩むべからむ 梁の上を歩まば落ちぬべし 餘りに事に甚しく物にせちになれば(三)行はれぬのみか(四)うとまれぬべし (こは事物に對して餘地(五)なきなりと(六)聞きぬ

(1)	べし	ベク	ベク	ベシ	ベキ	ベケレ	○	終止	可能
(2)	べから	ベカラ	ベカリ	ベカリ	ベカル	ベカレ	○	未然	可能
	む	○	○	ム	ム	メ	○	終止	推量
(3)	ぬ	ズ	ズ	ズ	ズ	ネ	○	連體	打消
	れ	レ	レ	ル	ル	ルレ	レ	未然	可能



(6)	(5)	(4)		
		ぬ	れ	レ
ぬ	なり	ベレ	ナ	レ
ナ	ナラ	ベク	ナ	レ
ニ	ナリ	ベク	ニ	レ
ヌ	ナリ	ベシ	ヌ	ル
ヌル	ナル	ベキ	ヌル	ルル
ヌレ	ナレ	ベケレ	ヌレ	ルレ
ネ	ナレ	○	ネ	レ
終止	終止	終止	終止	連用
完了	指定	當然	完了 <small>意を強める</small>	受身

(一四) 左ノ文ノ傍線ヲ施セル部分ニ含メル活用アル語ヲ摘出シテソノ品詞名ト活用トヲ示セ。

(静岡高校)

(上略) 偶像が破壊せられなくてはならないのは、それが象徴的の效用を失つて硬化する故である。

破壊せ	シセ	動詞
られ	ラレ	助動詞
なく	○	助動詞
なら	ナラ	動詞
	ナリ	
	ナル	
	ナレ	
	ナレ	

ない	○	助動詞
失フ	ハ	動詞(促音便)
硬化する	シセ	動詞
である	デアラ	助動詞
	デアリ	
	デアル	
	デアル	
	デアレ	

『備考一、助動詞「ナイ」は未然形を缺く。』

二、「デ」助動詞、「アル」動詞の二品詞とする説もある。百二節(七一頁)参照。

(一五) 左の表中に於ける助動詞及び動詞の活用語に接続する規定(例外あるものはそれ)及びその用例を所定の欄内に記入せよ。

(三高)

語	丈			活用語に接続する規定	用例
	(1) き	(2) らし	(3) とも		
	連用形 <small>(カ變の連用形 には接しない)</small>	終止形 <small>(但ラ變 連體形)</small>	動詞終止形。形容詞連用形 <small>(未然形)</small>	花も散りき	花散るらし 見る物あるらし
					障ありとも行かん 雨つよくとも恐れじ



口	(4)ナ(禁止)	終止形	行クナ スルナ
語	(5)マイ	四段ニハ終止形ニソノ他ニハ未然形	行クマイ來マイシマイ 捨テマイ悔イマイ

(一六) 左の文中の活用語を抽出してそれぞれの品詞名及び活用を表中に記入せよ。  
(同上)

君の見らるゝ如き結果を生じたる所以は簡単に述べ難し

活用語	品詞名	活				用
		未然	連用	終止	連體	
見	動詞	ミ	ミ	ミル	ミル	ミ
らるる	助動詞	ラレ	ラレ	ラル	ラルル	ラレ
如	助動詞	ク	ク	シ	キ	〇
生	動詞	生ゼ	生ジ	生ズ	生ズル	生ゼ
た	助動詞	タラ	タリ	タリ	タル	タレ

(一七) 左の文に誤あらば正せ。

(波速高校)

述	べ	動詞	ノベ	ノベ	ノブ	ノブル	ノブレ	ノベ
が	たし	形容詞	ガタク	ガタク	ガタシ	ガタキ	ガタケレ	〇

悪が榮へ善が衰へるような社會であつてはならない。正義と人道とが絶へず人々の反省を促し、善いもの正しいものが常に幸福であるような社會でありたい。悔ひることなく恥じることなき生活は聖人より外にあり得やうとは思へぬ。故に先ず人人の反省悔過といふことから善い社會は生まれて來るのだ。

榮え(ヤ行) やうな(様ノ意) 絶えず(ヤ行) やうな(様意) 悔いる(ヤ行) 恥ぢる(ダ行)  
得よう(推量ノ助動詞) 先づ

(一八) 文法上ノ誤アラバソノ右方ニコレヲ訂正セヨ。但シソノ理由ハ記スルニ及バズ。

(六 高)

生來無愛嬌で無口な彼が私に與えた最初の印象はそうよいものではなかつたが、その後永く交際して居るうちに立派な人格者である事を十分知りうるようになった。



こ<sup>o</sup>うい<sup>o</sup>ふ<sup>o</sup>経<sup>o</sup>験<sup>o</sup>から考<sup>o</sup>えて<sup>o</sup>み<sup>o</sup>ると最<sup>o</sup>初<sup>o</sup>の印<sup>o</sup>象<sup>o</sup>とい<sup>o</sup>う<sup>o</sup>もの<sup>o</sup>が必<sup>o</sup>ず<sup>o</sup>し<sup>o</sup>も正<sup>o</sup>確<sup>o</sup>な<sup>o</sup>もの<sup>o</sup>とは思<sup>o</sup>わ<sup>o</sup>れ<sup>o</sup>な<sup>o</sup>い<sup>o</sup>のであ<sup>o</sup>る<sup>o</sup>。

(一九) 左ノ俳句中活用スル語ニ傍線ヲ施シ其ノ活用形ノ名稱ヲ記セ。(七 高)

名は知らず草毎に花あはれなり

(二〇) 文語「讀む」ノアラユル敬語ノ形ヲ示セ。

(七 高)

未然形 (連用形) 終止形  
名は 知らず あはれなり

(1) 讀ます	サ	シ	ス	ス	セ	セ	軽い敬語として 上古に用ゐらる
(2) 讀み給ふ	給ハ	給ヒ	給フ	給フ	給ヘ	給ヘ	重い敬語として 上古より現在に至る
(3) 讀み給ふる	ヘ	ヘ	フ	フル	フレ	ヘ	中古より中古文系に謙遜 語として用ゐらる
(4) 讀まる	レ	レ	ル	ルル	ルレ	レ	中古より現在に至る

(5) 讀ましめ	シメ	シメ	シム	シムル	シムレ	シメ	中古より中古文系に重い 敬語として用ゐらる
(6) 讀ませ	セ	セ	ス	スル	スレ	セ	「しむす」は單獨に用ひ ず、中古より現今に至る
(7) 讀み奉る	ラ	リ	ル	ル	レ	レ	上古より謙遜語として用 ひ今日に至る
(8) 讀み聞ゆ	エ	エ	ユ	ユル	ユレ	エ	中古より謙遜語として中 古文系に用ひらる
(9) 讀み侍り	ラ	リ	リ	ル	レ	レ	中古より對話敬語として 中古文系に用ゐらる
(10) 讀み候	ハ	ヒ	フ	フル	ヘ	ヘ	主として近古より用ひられ 書簡文として現代に至る

以上は助動詞である。

敬語の動詞の結合したのは

(1) 讀みおはす	オハサ	オハシ	オハス	オハス	オハセ	オハセ	上古より
-----------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------







「る」「せらる」「せ給ふ」「しめ給ふ」等受身使役から轉じたものと「奉る」「候」と口語と位でよからうと思ふ。但し敬語に一、尊敬 二、謙遜 三、鄭重(對話敬語)の三つの別のあることを判然と記し置く必要がある。

(二一) 次ノ文句ニツキ助詞ヲ指摘シテ、其ノ右側ニ傍線ヲ附スベシ。(松山高校)

(イ) 甚だイウリヨすべきものあるのみならず

(ロ) 道徳心のテイカに原因する所なしとせず

(ハ) 物質文明ヘンヨヤウにエンゲンせることはヒテイし難き事實なり

(二三) 左ノ文ニ文法上ノ誤アラバ、コレヲ訂正シテソノ理由ヲ記セ。(高知高校)

松葉が一面に浮むで水を蔽ふてゐるので、一寸池があるように見へ無い。

「浮んで」と訂正する。「浮みて」の撥音便である。「蔽うて」「蔽ひて」のう音便。「やう」様子の意である。見え(ヤ行の動詞)「ない」形容詞のときは「無い」と書くが、「助動詞のときは假名でかく。こゝは上に動詞があるから、助動詞である。

(二三) 左ノ歌ノ活用スル語ヲ摘出シテ、ソノ活用ヲ表示セヨ。

鶯におどろかされて聞ちかく今朝ひらけたる梅を見るかな

(同上)

おどろかさ	サ。	シ	ス	ス	セ	セ
れ	レ	レ。	ル	ルル	ルレ	レ
ちかく	ク	ク。	シ	キ	ケレ	○
ひらけ	ケ	ケ。	ク	クル	クレ	ケ
たる	ラ	リ	リ	ル。	レ	レ
見る	ミ	ミ	ミル	ミル。	ミレ	ミ

(二四) Where did you go yesterday? ヲ

(山口高校)

(一) You ヲ父トシタ場合(コノ問ヲ自分ノ父ニ向ツテ發シタ時)

(二) You ヲ弟トシタ場合(コノ問ヲ自分ノ弟ニ向ツテ發シタ時)

ニワケソレト

(a) 文語 (b) 口語ヲ用ヒテ邦文ニ譯シテクレタマヘ。

(a) 文語

(一) 父上は 昨日 いづこに 行かせ給ひしか。



(二) 汝は 昨日 夕ぐせに 行きしか。

(b) 口語

(一) お父<sup>おとう</sup>さんはきのふどこへおこしなさいましたか。

(二) お前<sup>まへ</sup> 昨日<sup>きのう</sup> どこへ いったか。

(二五) 左ノ文ノ單語ノ右ニ傍線ヲ引キ所屬品詞名ヲ記セ。

(福岡高校)

タトヘバ 鳥啼<sup>なづな</sup>き けり

名助 形動 名 助動 名助 名助 形 名助 動 助動 助  
世に 稀なる もの 唐めき たる 名の 聞き にくく 花も 見なれ ぬ など

副 形 動 助動 副 代助 形 形 名助 形動 助動  
いと なつかしから ず おほかた 何も 珍しく あり 難き ものは よから ぬ

名助 動 名 助動  
人の もて興ずる もの なり

(二六) 左ノ和歌ノ中ノ活用アル言葉ヲ指摘シ、且ツ其活用形ヲモ示ヒ。(臺北高校)

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ

越え	ユエ	コエ	コユ	コユル	コユレ	コエ
くれ	コ	キ	ク	クル	クレ	コ
よる	ヨラ	ヨリ	ヨル	ヨル	ヨレ	ヨレ
見ゆ	ミエ	ミエ	ミユ	ミユル	ミユレ	ミエ

(二七) 左ノ歌ヨリ活用スル語ヲ摘出し其ノ種類及ビ活用形ヲ表ニテ示セ。

(東京商大専門部)

霜まよふ空にしをれし雁がねのかへるつばさに春雨ぞふる

まよふ	ハ	ヒ	フ	フ	ヘ	ヘ	動詞
しをれ	レ	レ	ル	ルル	ルレ	レ	動詞
し	〇	〇	キ	シ	シカ	〇	助動詞
かへる	ラ	リ	ル	ル	レ	レ	動詞
ふる	ラ	リ	ル	ル	レ	レ	動詞







(1)「植ゑて」 ヲ行下二段連用形である。

(2)「收むる」 原文は口語になつてゐる。文語は下二段連體形である。

(ハ)負<sup>(1)</sup>ふた子におし<sup>(2)</sup>えられ<sup>(3)</sup>浅瀬を渉る。

(1)負<sup>(1)</sup>うた子「負ひたる」のう音便。

(23)をしへられ ハ行下二段未然形である。

(三二) 左ノ歌ノ中ヨリ動詞・形容詞・助動詞ヲ摘出シソノ活用形ヲ表示セヨ (東京女大)

みよしの、山の白雪積るらし故郷寒くなりまさるなり

春來ぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらしとぞ思ふ。

積	る	ラ	ル	レ	レ	動詞
ら	し	○	ラシ	ラシ	○	助動詞
寒	く	ク	シ	ケレ	○	形容詞
な	り	ラ	ル	レ	レ	動詞
まさ	る	ラ	ル	レ	レ	動詞

「なり」は詠歌の助動詞で終止形につく。

(三三A) 次ノ文章ニ傍線ヲ施シ一ツノ單語ニ分チテ其ノ何品詞ナルカヲ答ヘヨ。

(福岡女專)

な	り	ラ	ル	レ	レ	助動詞
來	コ	ナ	ク	ケレ	コ	動詞
ぬ	ハ	ナ	ヌ	ヌレ	ネ	助動詞
い	ヘ	ハ	フ	ヘ	ヘ	動詞
な	カ	カ	ク	ケ	ケ	動詞
ぬ	ズ	ズ	ヌ	ネ	○	助動詞
あ	ラ	ラ	ル	レ	レ	動詞
じ	○	○	ジ	ジ	○	助動詞
思	ハ	ヒ	フ	フ	ヘ	動詞

西山を<sup>名</sup> 脚む<sup>助動</sup> 二十三夜<sup>名</sup> の<sup>助</sup> 残月<sup>名</sup> 今<sup>副</sup> 些<sup>副</sup> し<sup>名</sup> 前<sup>助</sup> まで<sup>助</sup> 降<sup>動</sup> 續<sup>助動</sup> い<sup>名</sup> た<sup>助動</sup> 五月雨<sup>名</sup> に<sup>助</sup> 洗<sup>動</sup> は



助動 助動 名助 名 副 名助 助動 助動 助名 助名 助動 助  
 れ た 顔 の 清さ まだ 化粧 は 止め ず に 雲 の 布巾 を 携へ て  
 折々は みづから 拭つ てる ます [拭つ] てる ます 一説(六七頁参照)

『註一、「今些し前まで」を一括して取扱ふのは文章法のこと、品詞としては右のやうにわけける。

註二、「少し」は名詞につく副詞である。かういふ例としては、稍東。わづか三人の「やゝ」「わづか」もある。

(三三B) 次ノ文章に誤アラバ正シテ其ノ理由ヲ説明セヨ。

(イ)思ふてここに至らばうたた感慨にたえず

(ロ)老ひも若きもおまつりを見やうとたのしむでその日のくるのを待つてゐた

(イ)思。うてここに至らばうたた感慨にたへず。

「思。うて」は「思ひて」のう音便。「堪へ」はハ行下二段未然形。

(ロ)「老い」ヤ行の動詞から名詞に轉じた語。「見。よう」決意(未來)の助動詞。「たのしんで」「たのしみて」の撥音便。

(三四) 次ノ文ニツキ左ノ問ニ答ヘヨ。

(京都府女子専門學校)

一、本來ノ名詞ト轉來ノ名詞トソレゾレ幾ツアルカ、其ノ數ヲ書ケ。

二、文法上若シ誤アラバソレヲ拔キ出シテ正シキ文ニ直シ、且ツ訂正セシ理由ヲ記セ。

三、「とも」トイフ助詞ノ接續法ヲ説明セヨ。

四、「べかり」トイフ助動詞ノ接續法ヲ説明セヨ。

五、形容詞ト變格活用ノ動詞トヲ拔キ出シテ其ノ活用ヲ書ケ。

暇ある人さびしさのあまり暇なく 時を惜む人のもとに來り心のどけくよしなき長物語し主人にいはるるこそむけに心なきわさなりされどかかる人に對せんときわが心かなはずともひたすらに面のけしきあしく詞づかひ不順なるべからず。

一、本來の名詞十六(、をうつて示す)轉來名詞四つ(○で示す)

二、「暇なく時を惜む人」を「暇なくて時を惜む人」と訂正する。原文では「暇なく」が「暇ある人」を主語とした述語のやうに取られる。これはすぐ下へつゞくのである。

主人にいはるるこそむけに心なきわさなれ 「こそ」の結は已然形であるべきである。

三、心かなはずとも 打消助動詞「ず」の活用は

ズ	ズ	ズ	ヌ	ネ	○
---	---	---	---	---	---



右のやうである。その連用形(第二活)から「とも」に接続する。「心になはず(アリ)とも」の「アリ」を略したのである。

『註 元來「ず」は特殊活用ではあるが、形容詞に似て、連用形が多く副詞的用法をなす。』とも」は動詞では終止形につゞき形容詞では、その連用形につくといふ説と未然形につくといふ説と二つあるが、前の説に従ふのである。それ故に「ず」の連用形から「とも」につく。

(四)「べかり」は普通は終止形に接するのであるが、ラ變又はラ變系の語に限り連體形から接続する。この文はその例に當る。「なる」は指定の助動詞、活用はラ變である。その連體形に接してゐる。

『註 「不順」「不順を戒む」といふ用法があるから、「不順」を名詞とし、下の「なる」を指定の助動詞とする。』

なく	ナク	ナク	ナシ	ナキ	ナケレ	○	形容詞
のどけく	ノドケク	ノドケク	ノドケシ	ノドケキ	ノドケケレ	○	同
よしなき	ヨシナク	ヨシナク	ヨシナシ	ヨシナキ	ヨシナケレ	○	同
心なき	心ナク	心ナク	心ナシ	心ナキ	心ナケレ	○	同
あしく	アシク	アシク	アシ	アシキ	アシケレ	○	同

ある	アラ	アリ	アリ	アル	アレ	アレ	ラ行變格活用
かかる	カカラ	カカリ	カカリ	カカル	カカレ	○	同
し(長物語)	セ	シ	ス	スル	スレ	セ	サ行變格活用
對	セ	シ	ス	スル	スレ	セ	同

『註 「人のもとに來り」の「來り」はもとカ變連用形の來が「あり」に熟語を作つたラ行變格活用の動詞であつたが、終止形が「來る」となつて四段活用にかはつた。それ故に省いた。』



### (乙) 昭和三・四・五年度入試問題類別の解説

#### 一、品詞の解剖、其他に關する問題

(一) 左ノ文章ノ傍線ヲ施セル語ノ品詞ヲ書ケ。

副詞 名詞

手かくわざは古へ物のまじるしに出できはしまりたるなればよきあしきあけつらふべくもあら

助動詞

助詞

助詞

ぬすぢなるものから古へ人の書けるあとを見れば心さへ清らにおほゆるはいかなる故にかと思ふ

形容動詞

副詞

に其の古へ人のすなほなる真心のおのづからふでにあらはるるによりてなりけり

(昭五松江高校)

わが國は地形を以て觀ればエンエンとしてチャウダの走れるが如く南北にノびて東西にチヂみ地理的にタイリクとブンリして海中にコリツし蒼波ヤウヤウとしてシシウをカコみ東西南北シウシフの通ぜざるなき海國なり。氣候を以て觀れば地方によりてカンダンイチジルしくコトなるもオホムねチウワにしてジンルキの生活に適し多量のスピジョウキとタシユの動植物とは奇しき山

容スキタイに美觀をソへて其の住民のヅナウにラクドのクワンネンを與へ延いてムジャウの愛國心を形成せしめたるヲンタイなり。此の地形と氣候とはジツにわが日本帝國をして今日あるに至らしめし二大ゲンインにして其の長き國民生活の歴史はツネに此の二者のオンケイにアヅからざるは無し。

(二) 右ノ文章中、右側ニ○印ヲ附シタル語ノ品詞名ト活用形トヲ左ノ欄内ニ記入セヨ。

(昭五 松山高校)

る	助動詞	連體形
なき	形容詞	連體形
適し	動詞	連用形
しめ	助動詞	連用形
し	助動詞	連體形

(三) 左の各活用語の品詞名及び其の文語としての活用を表示せよ。(昭五高知高校)  
〔注意〕 左の各語は終止形を擧げたるものなり。



(イ)課す (ロ)まし (ハ)とし (ニ)すう (ホ)る

活用語	品詞名	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(イ) 課す	動詞	セ	シ	ス	スル	スレ	セ
(ロ) まし	助動詞	○	○	マシ	マシ	マシカ	○
(ハ) とし	形容詞	トク	トク	トシ	トキ	トケレ	○
(ニ) すう	動詞	スエ	スエ	スウ	スウル	スウレ	ウエ
(ホ) る	助動詞	レ	レ	ル	ルル	ルレ	レ

名助名 動名助動 助代助動 名助副助  
古のふみ見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと

(四) 右ノ短歌ニツキテ、左ノ各項ニ答ヘヨ。

- (一) 品詞に分解せよ。
  - (二) 用言を抽出して活用表を作り、こゝに用ひられたるはその何活用形なるかを指摘せよ。
  - (三) 全體の主語と述語とを挙げよ。
- (昭五 奈良女子高等師範學校)

(二)

語形	未	然	連	用	終	止	連	體	已	然	命	令
見る	ミ	ミ	ミ	ミ	ミル	ミル	ミル	ミレ	ミ			
思ふ	ハ	ヒ			フ	フ	フ	フ	ヘ			
治むる	メ	メ			ム	ム	ム	ム	ムレ			

(三) 全體の主語——「われ」(省略) 全體の述語——「思ふかな」

(五) 次ノ縦線ヲ施セル語ヲ文法上ヨリ説明セヨ。

- (イ) ふるさととなりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり
  - (ロ) 庭の面はまだ乾かぬに夕立の空さりけなくすめる月かな
  - (ハ) 往にし安元三年四月二十八日かとよ
  - (イ) ぬ(完了の助動詞)の連用形
  - (ロ) 接續助詞「のに」の意
  - (ハ) 往ぬ ナ行變格動詞の連用形の語尾
- (昭五 神宮皇學館)

(六) 助動詞「べし」のあらはす意味につき、文例をあげて述べよ。(昭五 金澤高工)



油盡くれば火は消ゆべし

右の「べし」は因に應じてその果の理に當ることを示す意味で、當然又は必然の「べし」といふ。因縁・道理・義務を據りどころとする。今日口語の「べき」はこの意味でつかつてゐる。

風起らば雨やむべし

右はまだ決定しない未然の事柄について推量する意で、之を推量の「べし」といふ。

金は山にすつべく、玉は淵に投ぐべし

右は「すてるのがヨイ」「投げるのがヨイ」といふ意で、適當の「べし」と云ふ。

三尺の秋水鐵をも斷つべし

右は「斷つことがデキル」といふ意で、可能の「べし」である。

いかにもして討ちとり申すべし

右は「討ちとりマセウ」といふ意で決意を表したものである。

講堂に參集すべし

右は「集マレ」といふ命令の意である。

(七) 次ノ文中傍線ヲ施シタル語ノ品詞ノ名ヲアゲ又ソノ活用アルモノハ之ヲ表示セ

ヨ。

うるはしき日は夢の如く消え去りて我が思ひのみぞ獨り老いにける。(昭四 松本高校)

品詞「うるはしき」形容詞 「如く」助動詞 「思ひ」名詞。「獨り」副詞 「に」助動詞

うるはしき	シク	シク	シ	シキ	シケレ	〇
如く	ク	ク	シ	キ	〇	〇
に	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ

(八) 左ノ三ツノ「ない」ノ異同ヲ説明セヨ。

御配慮まことにかたじけない。

いかなる時の革新にも婦人の覺醒を伴はない場合はない。

(昭四 福岡縣女子専門學校)

「かたじけない」形容詞の語尾。「伴はない」動詞「伴ふ」の未然形の下に結びついた打消の助動詞である。

「場合はない」「場合は」といふ主語に對して、述語となつてゐるので形容詞である。

「備考 形容詞だけで述語となるのは、日本語の特異性で英語・獨逸語に無いことである。外國語では必ず形容



詞に「アル」といふ動詞が伴はなければ述語にならぬ。」

(九) 左ノ文ヲ各品詞ニ解剖セヨ。

今日清子さんがお見えになりましたけれども今日は母の誕生日で差支へますからと御ことはりいたしました。

(昭四 同上)

副	名	助名(動詞的)	助動	助動助動	助	名	助名助	名	助動
今日	清子さん	が	お見え	になり	まし	た	けれども	今日	は
									母の
									誕生日
									で
差支へ	ます	から	と	御ことわり	いたし	まし	た		

【備考】品詞は語の用法でままるのである。同一の「今日」といふ語でも、はじめの方は下の「お見えになりました」を修飾した文の副素です。あとの「今日」は主語となつてゐる文の主素である。

「になり」敬語の助動詞である。「で」「誕生日だ」の「だ」は指定の助動詞、その連用形で中止の表現法である。【一〇二】(七〇頁)参照。

(一〇) 左ノ文ニ於ケル動詞ト助動詞ト及助動詞相互ノ接續ヲ説明セヨ。

やあ、尼前、秀秋が身に國奪はれむ罪覺えず。命あらむ限は、たゞもとのまゝにこそあるべけれ。「速に首を刎ねらるべう候」と申せ。尼前。

(昭三 東女高師)

動詞四段	受身	未來	動詞下二	打消	動詞ラ變	未來
奪は	れ	む	罪	ず	命	あら
未然	未然	未然	未然	未然	未然	未然
動詞ラ變	當然	動詞下二	受身	適當	敬語	動詞
ある	べけれ	刎ね	らる	べう	候ふと	申せ
連體		未然	終止	連用	命令	命令

右の通り受身・打消・未來の助動詞は未然形に結びつき、「べし」はラ變動詞からは連體其他は終止形につく。受身「らる」の終止形に「べし」がついた例が右に見えてゐる。敬語助動詞「候ふ」は連用形「べく」のう音便についた例である。

つまり受身使役打消未來は未然形に、「り」と未來との外の時の助動詞は連用形に、推量の助動詞は終止形、但しラ變系のは連體形に、指定の「なり」は連體形につくのである。

(一一) 動詞「書く」「始む」「來」ニ打消・推量・受身・使役・過去ノ各助動詞ヲ連ネテ左表ニ記入セヨ。

書	く	書かす	書く	らる	書かる	書かしむ	書き	けり
		打消	推量	受身	使役	過去		



始	む	始めす	始むべし	始めらる	始めしむ	始めけり
來	來 <sup>マ</sup> す	來 <sup>マ</sup> じ	來 <sup>マ</sup> べし	來 <sup>マ</sup> らる	來 <sup>マ</sup> しむ	來 <sup>マ</sup> けり
			來らん		來さす	

(昭三 奈良女高師)

(一一一) 副詞ノ意義ヲ例ヲ擧ゲテ説明セヨ。

(昭三 高校入學資格試験)

我が最も幼き弟の巧に歌ふ聲が、今聞ゆ。

雷がゴロ／＼ト鳴ツテ、アマリオソロシイノデ、急イデ歸ツタ。

山は巍然として聳え、身體は益々疲勞して、前進すること到底、不可能なり。

ドンナニ寒クテモ、ナルベク行クヤウニ早く勸メヨ。

右の最も、巧に、今、ゴロ／＼ト、アマリ、急イデ、巍然として、益々、到底、ドンナニ、ナルベク、早くの如く、主に動詞、形容詞の意義を限定する語を、副詞といふ。

この果實は殆どすべて青し。

僕ハ少シ斜ニスワル。

非常ニ早く來マシタネ。

頗ル重ク見受ケ申シマス。

右の殆ど・少シ・非常ニ・頗ルは他の副詞の意味を限定してゐるもので、やはり副詞である。

けに都會は便利なり。

畢竟天佑の致すところなり。

たゞ半日の道ぞかし。

要するにこれ争議の端を啓かん。

右の「けに」・「畢竟」・「たゞ」・「要するに」は語や句の意味を限定してゐるもので、これもやはり副詞である。

副詞は動詞・形容詞および他の副詞の意味を限定し、又時としては語句の意味をも限定する用法の語をいふ。

(一一三) 左ノ歌ノ中ノ傍線ヲ施シタル語ニツキテ、各ソノ品詞名ヲ記シ、且ツ文法上ノ意義ヲ説ケ。

鶯は谷の古巢を出でぬともわが行方をば忘れざらなむ

(昭三 三高)

「ぬ」助動詞 「が」助詞 「なむ」助詞



「ぬ」は「出で」といふ動詞の連用形について、「出テシマフ」といふ強めた表現法で、普通に完了の助動詞と云ふ。其の活用はナ・ニ・ヌ・ヌル・ヌレ・ネの終止形である。「が」第二格（領格ともいふ）を表す助詞で普通は「ノ」といふ。もと一音の人代名詞の下に用ゐられる慣習であつた。「わが」、「たが」、「汝が」等は、この例である。歌などでは「君が」といつて「君の」とはいはない。「忘れさらなむ」の「なむ」は未然形について願望「他に向つてかうしてくれ」と誂あつちへる意味をもつ助詞である。

(一四) 次ノ文中ノ傍線ヲ施セル語ノ品詞ノ名ヲ擧ゲ且ツ其ノ活用アルモノハコレヲ表示セヨ。

分け入るまゝに身にしみかへる深山の秋かぜ鹿の音ながらうちふくめるを聲きく時ぞとはかゝる折こそとおほゆこの山をしも越えれば故郷は空さへ見えじと思ふに更に名残おほゆる明けがたなり。

(昭三 高七)

「ながら」は「ごめに」「ぐるみ」「合せて」の意。助詞である。但し接尾語とする説もある。

「おほゆ」 動詞 「見え」 動詞

おほゆ	オボエ	オボエ	オボユ	オボユル	オボユレ	オボエ
-----	-----	-----	-----	------	------	-----

見ゆ	ミエ	ミエ	ミユ	ミユル	ミユレ	ミエ
----	----	----	----	-----	-----	----

(一五) 次ノ文カラ助動詞ヲ擇ビ出シテ、ソレニ相當スル口語助動詞ヲ擧ゲヨ。

陽曆の節句桃は咲かねど、春雲日を籠めて空氣は酒よりも濃やかなり。逗子の村を過ぐれば、梅花も白きはすでに過ぎむとし、椿は花葉よりも多く、ほてくとはや落ち初めぬ。綿弓鳴り鶏鳴き悠々として春村に滿つ。

(昭三 水戸高校)

咲かねど (ナイ) 過ぎむ (ヨウ) 初めぬ (タ)

『註 「濃やかなり」は形容動詞である。「なり」は助動詞でない。』

(一六) 次ノ文中右側ニ傍線ヲ施シタル語ノ品詞ヲ問フ。

(昭三 松本高校)

猛き人も遂には亡びぬ 偏に風の前の塵に同じ  
猛き(形容詞) も(助詞) ぬ(助動詞) 偏に(副詞) 同じ(形容詞)

### 二、活用に關する問題

(一) 左ノ文中ノ活用語ヲ摘出シテソレゾレノ品詞名及ビ活用ヲ表中ニ記入セヨ。



(イ) つくづくと空な眺めそこひしくば道とほくともはやかへりこむ。(文語)  
(ロ) もはや調べさせる暇はないらしい。(口語) (昭五 三高)

活用語	品詞名	未然形	活用形	終止形	連體形	已然形	命令形
眺め	動詞	ナガメ	ナガメ	ナガム	ナガムル	ナガムレ	ナガメ
こひしく	形容詞	コヒシク	コヒシク	コヒシ	コヒシキ	コヒシケレ	○
とほく	形容詞	トホク	トホク	トホシ	トホキ	トホケレ	○
かへり	動詞	カヘラ	カヘリ	カヘル	カヘル	カヘレ	カヘレ
こ	助動詞	コ	キ	ムク	クル	クレ	コ
む	助動詞	○	○	ム	ム	メ	○
調べ	動詞	シラベ	シラベ	シラベル	シラベル	シラベレ	シラベ
させる	助動詞	サセ	サセ	サセル	サセル	サセレ	サセ
ない	形容詞	ナク	ナク	ナイ	ナイ	ナケレ	○
らしい	助動詞	ラシク	ラシク	ラシイ	ラシイ	○	○

(二) 左ノ文章ノ中、動詞ニハソノ右方ニ傍線ヲ施シ、左方ニ何行何活用ナルカヲ示セ、但シ本文ノ解釋ヲ要セズ。

老いて後若き日の怠惰を悔いて徒に死ぬるものすくなからざるは眞に寒心に堪へざるなり。  
思つてここに至れば青年よろしく努力す可きなり。(昭五 六高)

老い 悔い 死ぬる すくなから 堪へ 思つ 至れ  
 ヲ行上二段 ヲ行上二段 ヲ行變格 ヲ行變格(形容動詞) ヲ行下二段 ヲ行四段 ヲ行四段  
 努力す  
 サ行變格

『備考「すくなから」「あり」の熟語で形容動詞である。但しヲ行變格の動詞とする説もある。とに角動詞に屬する語である。』

(三) 左ノ文中活用アル語ヲ悉ク抽キ出シ何活用ニ屬スルカ又此ノ文中ニ用キラレタル形ハ何形(何段)ナルカヲ答ヘヨ。  
ゆきくれてこのしたかけをやどとせばはなやこよひのあるじならまし (昭五 東京府立高校)

行き	ユカ	ユキ	ユク	ユク	ユケ	ユケ	(連用形)
くれ	クレ	クレ	クル	クルル	クルレ	クレ	(連用形)
せ	セ	シ	ス	スル	スレ	セ	(未然形)



なら	ナラ	ナリ	ナリ	ナル	ナレ	ナレ	(未然形)
まし	○	○	マシ	マシ	マシカ	○	(連體形)

備考 「まし」は係詞「や」の結で連體形である。

(四) 左ノ文ニツキテ下記ノ問ニ答ヘヨ。

夜々に霜は募りて樹々に紅は増す神無月の空のやゝ寒く夕日力なく春きて晩れし百舌の聲のみ残りぬ暮方のあはれさの身に浸むことかな見れば路の邊の草のいろく其とも分かず皆いづれも同じやうに枯れ果てゝ崩折れ偃せり珍らしからぬ冬野のさま取り出でて云ふべくはあらねども折からの我が懐に合ふところあり情を結び詞を束ねて歌とも成らば成して見むおゝそれよさまさまに花咲きたりと見し野邊のおなじ色にも霜がれにけり。

(1) 傍線ノ施シアル部分ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ。

(2) (イ) 本文中ノ「残りぬ」ノ「ぬ」ト「珍らしからぬ」ノ「ぬ」トノ文法上ノ相違ヲ簡單ニ記セ。

(ロ) 本文中ノ「空のやゝ寒く」ノ「の」ノ文法上ノ職能ヲノベ、且ツ之ト同類ノ用例他ニアラバ列舉セヨ。

(昭五 浦和高校)

(1) は略する。(2) (イ) 「残りぬ」の「ぬ」は動詞の連用形につく完了の助動詞の終止形で、「残ツタ」といふ意。「珍らしからぬ」の「ぬ」は動詞(形容動詞)の未然形につく打消助動詞「ず」の連體形で、「珍ラシクナイ」といふ意である。

(ロ) 「空のやゝ寒く」の「の」は第一格(主格)を示す助詞である。これと同類の用例は

空はやや寒く 口語では「空が少し寒くて」「が」といふ。

又「空もやや寒く」「空さへ……」「空なん」「空ぞ……」「空こそ……」等もつかはれる。

(五) 左ノ文ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ、別ニ傍線ヲ施セル部分ニ含メル動詞ト助動詞トノ連續及ビ助動詞相互ノ連續ヲ次ニ示セル例ニ倣ヒテ説明セヨ。

こよい雨いたくふり風はけしきに故郷のそらはさしおかれてまづ花の梢やいかなるらんと吉野の山のみよひとやすからず思ひやられていとどめもあはぬにこのやどのあるじにやあらんよなかにおき出でてさもいみじき雨風なかくて明日はかならずはれなんとぞいふなるききふせりていかでさもあらなんとねんじをり

(昭五 静岡高校)



例

あら	未ラ動 然形變詞	はれ	連下動 用形二詞	読み	連四動 用活用 形詞
ねんじ	連サ動 用形變詞	ん	終未助 止動來 形詞	たり	連完助 用動 形了詞
をり	終ラ動 止形變詞	いふ	連四動 體形段 詞	き	終過助 止動 形去詞
		なる	連指助 體動詞 形定詞		
		きき	連四動 用形段 詞		
		ふせ	已四動 然形段 詞		
		り	連完助 用動 形了詞		

『註「あらなん」の「なん」は願望の助詞。』

(六) 左ノ文ヲ解釋シ且ツ各助動詞ヲ擧ゲテソノ活用表ヲ示セ。

山高きが故に貴からず花驕れるが故に妙ならず籬落に著き流水に漂ふ名もなき小草の花にだにわれらが拾ふべき力と榮と詩と恵とはいとさにはあるをや。

ず	助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ズ							
ズ							
ズ							
ヌ							
ネ							
○							

(七) 次ノ和歌ヨリ動詞ヲ摘出シソノ活用ヲ表示セヨ。

こゝろよく我にはたらく仕事あれそれを仕遂けて死なむと思ふ (昭五 京城帝國大學豫科)

はたらく	はたら	カ	はたら	キ	はたら	ク	はたら	ケ	はたら	ケ
あれ	ア	ラ	ア	リ	ア	リ	ア	ル	ア	レ
仕遂け	シ	ト	シ	ト	シ	ト	シ	ト	シ	ト
死な	シ	ナ	シ	ニ	シ	ヌ	シ	ヌ	シ	ネ
思ふ	オ	モ	オ	モ	オ	モ	オ	モ	オ	モ

(八) 左ノ和歌ノ中ニアル動詞及形容詞ヲ摘出シテ其ノ活用ト形(又ハ段)トノ名ヲ示セ。



八重葎しけれるやどのさびしきに人こそ見えぬ秋は來にけり

(昭五 小樽高等商業學校)

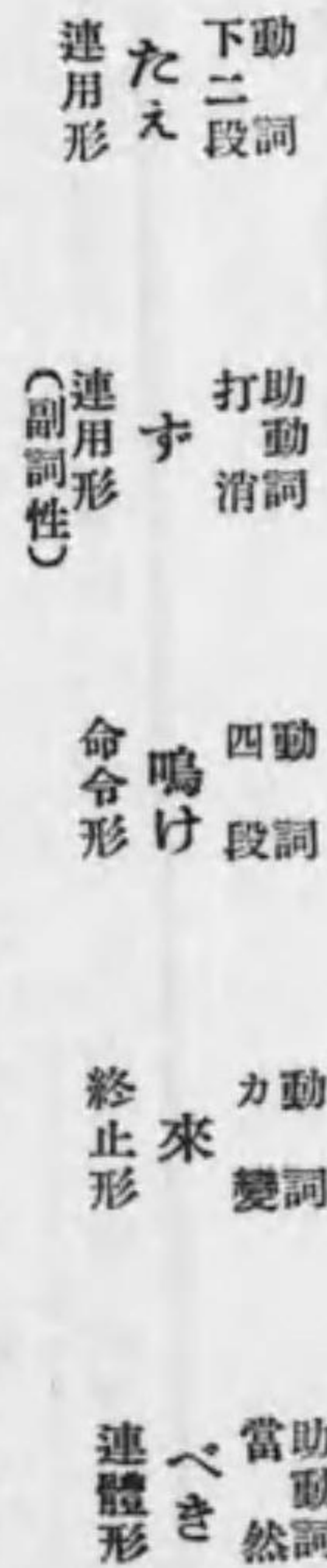
しけれ	シゲラ	シゲリ	シゲル	シゲル	シゲレ	シゲレ	已然形
さびしき	サビシク	サビシク	サビシ	サビシキ	サビシク	○	連體形
見え	ミエ	ミエ	ミユ	ミユル	ミユレ	ミエ	未然形
來	コ	キ	ク	クル	クレ	コ	連用形

(九) 左ノ歌ノ「や」、「か」ヲ説明シ、且用言ノ種類及ビ活用形ヲイヘ。

聲たえず鳴けやうぐひす一年に再びとだに來べき春かは

(昭五 臺北高等商業學校)

「鳴けや」の「や」は「ヨ」といふ意味、命令の下に添へる感動助詞。「春かは」の「か」は反語の意の助詞。



備考 用言を動詞、形容詞とする説と助動詞をも加へる説と二つある。そこで廣い方にして置いた。

「絶えず」を一語として副詞とも見られる。しかし上に聲といふ主語があつて、その述語であるから、右のやうに解する方がよい。

「す」の連用形で、副詞の用法の場合を副詞形といふ説がある。

(一〇) 左ノ歌ノ中ヨリ動詞ト助動詞トヲ摘出シテ其ノ活用表ヲ作レ。

急がずばぬれさらましを旅人の後よりはるる野路のむらさめ (昭五 東京高等師範學校)

急が	イツガ	イツギ	イツグ	イツグ	イツゲ	イツゲ	動詞
ず	ズ	ズ	ズ	ヌ	ネ	○	助動詞
ぬれ	ヌレ	ヌレ	ヌル	ヌルル	ヌルレ	ヌレ	動詞
さら	ザラ	ザリ	ザリ	ザル	ザレ	ザレ	助動詞
まし	○	○	マシ	マシ	マシカ	○	助動詞
はるる	ハレ	ハレ	ハル	ハルル	ハルレ	ハレ	動詞

備考 「まし」終止形と連體形と同形である。しかし「を」といふ接續助詞は連體形につく語である。「ましも、のを」といふ。



(一一) 次ノ歌ヨリ活用スル品詞ヲ取出シテ一々ソノ語尾ノ變化ヲ示セ。

をりをりにあそぶいとまはあるひとのいとまなしとてふみをみぬかな (昭五 廣島高等師範學校)

あそぶ	バ	ビ	ブ	ブ <sup>〇</sup>	ベ	ベ
ある	ラ	リ	リ	ル <sup>〇</sup>	レ	レ
なし	ク	ク	シ <sup>〇</sup>	キ	ケレ	〇
み	ミ <sup>〇</sup>	ミ	ミル	ミル	ミレ	ミ
ぬ	ズ	ズ	ズ	ヌ <sup>〇</sup>	ネ	〇

(一二) 左ノ文ヨリ活用ノアル品詞ヲスキ出シ、其ノ活用形ヲ左表ニ記入セヨ。

(イ) 月夜にはそれとも見えす梅の花香をたづねてぞ知るべかりける

(ロ) 幾匹とも知れぬ鳥が裏の森で騒ぎたててゐる

(昭五 東京女子高等師範學校)

未然形	連用形	終止形	連用形	已然形	命令形	
見え	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	え(よ)
						動詞下二

(一三) 次ノ句ヨリ助動詞ヲ抽出シテ意義ヲ説キ且ツ其ノ活用ヲ表示セヨ。

……名を得たる月なり……見むひと心のくまはれぬべし

(昭四 静岡高校)

す	ず	ず	ず	ぬ	ぬ	ね	〇	助動詞
たづね	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ね(よ)		動詞下二
知る	ら	り	る	る	れ	れ		動詞四段
べかり	ら	り	り	る	れ	れ		助動詞
ける	ら	〇	り	る	れ	〇		助動詞
知れ	れ	れ	れる	れる	れれ	れ(よ)		動詞下一 (可能)
ぬ	〇	ず	ぬ	ぬ	ね	〇		助動詞
騒ぎ	が	ぎ	ぐ	ぐ	け	け		動詞四段
たて	て	て	てる	てる	てれ	て		動詞下二
てるる	てる	てる	てるる	てるる	てるれ	てる(よ)		助動詞



助動詞	意	義	活							
			未然	連用	終止	連體	已然	命令	用	
たる	タ	完了	タラ	タリ	タリ	タル	タレ	タレ		
なり	デアル	指定	ナラ	ナリ	ナリ	ナル	ナレ	ナレ		
む	ダラウ	推量	〇	〇	ム	ム	メ	〇		
ぬ	シマフ完了(強める)		ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ		
べし	ダラウ 推量		ベク	ベク	ベシ	ベキ	ベケレ	〇		

(一四) 左ノ口語文ノ中ヨリ活用言(形容詞・動詞・助動詞)ヲトリ出シテ其ノ活用表ヲ作レ。

高慢な兎はのろい龜がどう吾して輩に追ひつかれようかと高をくゞつて途中でちよつと晝寝をしました

(昭四 東京高師)

追ひ	ハ	ヒ <sup>〇</sup>	フ	フ	ヘ	ヘ	動詞
のろい	ク	ク	イ	イ <sup>〇</sup>	ケレ	〇	形容詞

(二五) 左ノ文ヨリ活用ノアル品詞ヲヌキ出シ、其ノ活用形ヲ左表ニ記入セヨ。

(丙) いか<sup>〇</sup>にせむ<sup>〇</sup>來ぬ夜あまたの杜鵑待たじと思へば村雨の空  
 (丁) 釣れますかなどと文王そばに寄り

(昭四 東京女子高等師範學校)

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
つかれ	レ <sup>〇</sup>	レ	レル	レル	レレ	レ	動詞
よう	〇	〇	ヨウ	ヨウ <sup>〇</sup>	〇	〇	助動詞
くゞつ	ラ	リ <sup>〇</sup>	ル	ル	レ	レ	動詞
し	シセ	シ <sup>〇</sup>	スル	スル	スレ	シセ	動詞
まし	マセ	マシ <sup>〇</sup>	マス	マス	マスレ	マシセ	助動詞
た	タラ	タリ <sup>テ</sup>	タ	タ	タラ	〇	助動詞
む	〇	〇	む	む	め	〇	助動詞
せ	セ	し	す	する	すれ	せ(よ)	動詞サ變

以下これに倣ひて記入せよ



來 <sup>○</sup>	こ	き	く	くる	くれ	こ(よ)	動詞カ變
ぬ	ず	ず	ぬ	ぬ	ね	○	助動詞
待た	た	ち	つ	つ	て	て	動詞四段
じ	○	○	じ	じ	じ	○	助動詞
思へ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ	動詞四段
釣れ	れ	れ	れる	れる	れれ	れ	動詞下一
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ましせ	助動詞
寄り	ら	り	る	る	れ	れ	動詞四段

(一六) 左ノ和歌ノ中ニアル助動詞ヲ摘出シテ其ノ語ノ意義ト活用トヲ示セ。  
 春來ぬと人はいへどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ (昭四 小椋高商)

ぬ	タ	完了	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
ぬ	ナイ	打消	ズ	ズ	ズ	ヌ	ネ	○
じ	マイ	推量的打消	○	○	ジ	ジ	ジ	○

(一七) 左ノねノ意義ヲ區別シ且ツソノ活用ヲ表ニ記入セヨ。 (昭四 三高)

(イ) 人こそ見えね秋は來にけり  
 (ロ) とく去りねとのたまふ

(イ)	ナイ	打消の助動詞	ズ	ズ	ズ	ヌ	ネ <sup>○</sup>	○
(ロ)	シマへ	完了の助動詞	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ <sup>○</sup>

(一八) 次ノ文中中カラ動詞形容詞ヲ撰ビ出シテ活用形(口語ノ)ヲ表デ示セ。 (昭四 山口高校)

主婦といふのは、眼の凹んだ、鼻のしやくれた顎と頬の尖つた鋭い顔の女で一才見ると年恰好の判断が出来ない程女性を超越して居る。

此ノ文ノ主語(又ハ主部) ニーヲツケ、モシ句(節)ヲ含ンデキタラ、ソノ句(節)ノ主語ニハツツケヨ。

いふ	イハ	イヒ	イフ	イフ	イへ	イへ
----	----	----	----	----	----	----



凹ん	クボマ	クボミ	クボム	クボム	クボメ	クボメ	撥音便
しやくれ	シヤクレ	シヤクレ	シヤクレル	シヤクレル	シヤクレレ	シヤクレレ	
尖つ	トンガラ	トンガリ	トンガル	トンガル	トンガレ	トンガレ	促音便
鋭い	スルドク	スルドク	スルドイ	スルドイ	スルドケレ	○	
見る	ミ	ミ	ミル	ミル	ミレ	ミ	
出来	デキ	デキ	デキル	デキル	デキレ	デキ	
超越し	シセ	シ	スル	スル	スレ	シセ	

主婦といふのは 眼の凹んだ 鼻のしやくれた  
顎と頬の尖つた 年恰好の判断が出来ない

(一九) 左ノ動詞ノ活用ノ種類ヲ問フ。但シ、自動他動ノ兩用アルモノハ各別ニ之ヲ示セ。  
(昭四 高知高校)

- (イ) 吹く (ロ) 竝ぶ (ハ) 折る (ニ) 射る (ホ) 經
- (イ) 吹く 他動四段 自動四段

- (ロ) 竝ぶ 他動下二段 自動四段
- (ハ) 折る 他動四段 自動下二段
- (ニ) 射る 上一段
- (ホ) 經 下二段

右の下二段活用は口語では下一段活用となる。

(二〇) 左ノ歌ヨリ活用アル語ヲ摘出シテソノ活用ヲ表ニテ示セ。

八重葎しける宿のさびしさに人こそ見えね秋は來にけり

(昭四 高知高校)

しけれ	シゲラ	シゲリ	シゲル	シゲル	シゲレ	シゲレ	動詞
る	ラ	リ	リ	ル	レ	レ	助動詞
見え	ミエ	ミエ	ミユ	ミユル	ミユレ	ミエ	動詞
ね	ズ	ズ	ズ	ヌ	ネ	○	助動詞
來	コ	キ	ク	クル	クレ	コ	動詞
に	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ	助動詞



けり	ケラ	〇	ケリ	ケル	ケレ	〇	助動詞
----	----	---	----	----	----	---	-----

備考 「さびしさ」は「さびし」といふ形容詞に接尾語「さ」が結びついて名詞となつてゐるから、活用語と認めない。

「けり」の第一活は古く「けらすや」といふ用語があつた。第二活第六活はない。

(二二) 次ノ俳句ノ中ヨリ動詞・形容詞・助動詞ヲ選ビ出シテ各々ツノ活用ヲ示セ。  
鶯の遠き日も暮れにけり (昭四 京都府立醫科大學豫科)

遠き	ク	ク	シ	キ	ケレ	〇	形容詞
暮れ	レ	レ	ル	ルル	ルレ	レ	動詞
に	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ	助動詞
けり	ラ	〇	リ	ル	レ	〇	助動詞

(二三) 左ノ語句ヲ解釋セヨ。但シ傍線ヲ施シタル部分ハ解釋シタル後、品詞ノ名ヲ舉ゲ、且ツソノ活用アルモノハ表ヲ示シテ説明セヨ。

(イ) ゆめな怠りそ (ロ) ゆかし (ハ) よすが (ニ) あけつらふ

(ホ) はしたなし (昭四 六高)

(イ) 「ゆめ」 副詞 (ロ) 「ゆかし」 形容詞 (ニ) 「あけつらふ」 動詞

ゆかし	ユカシク	ユカシク	ユカシ	ユカシキ	ユカシケレ	〇
あけつらふ	アゲツラハ	アゲツラヒ	アゲツラフ	アゲツラフ	アゲツラヘ	アゲツラヘ

(二三) 次ノ歌ノ中ヨリ活用語ヲ擇ビ出シテソノ活用形ヲ表ニテ示セ。

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ  
三吉野の山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ (昭三 東高師)

ちり	チラ	チリ	チル	チル	チレ	チレ
くる	コ	キ	ク	クル	クレ	コ
ある	アラ	アリ	アリ	アル	アレ	アレ
らむ	〇	〇	ラム	ラム	ラメ	〇



ぬ	せ	し	に	入り	わけ	ふみ
ズ	セ	○	ナ	イラ	ワケ	フマ
ズ	シ	○	ニ	イリ	ワケ	フミ
ズ	ス	キ	ヌ	イル	ワク	フム
ヌ	スル	シ	ヌル	イル	ワクル	フム
ネ	スレ	シカ	ヌレ	イレ	ワクレ	フメ
○	セ	○	ネ	イレ	ワケ	フメ

(二四) 次ノ語ノ活用形ヲ表示セヨ。

(昭三 高校入學資格試験)

美し	有り	加ふ		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
シク	ラ	ヘ							
シク	リ	ヘ							
シ	リ	フ							
シキ	ル	フル							
シケレ	ル	フレ							
○	レ	ヘ							

(二五) 左ノ文中ヨリ活用アル語ヲ抽出シテ其活キ方ヲ示セ。草木の花あまたこゝかしこに咲き出でたるを人皆をかしとめであへり

(昭三 一高)

植う	心す
エ	セ
エ	シ
ウ	ス
ウル	スル
ウレ	スレ
エ	セ

咲き	出で	たる	をかし	めで	あへ	り
サカ	イデ	タラ	チカシク	メデ	アハ	ラ
サキ	イデ	タリ	チカシク	メデ	アヒ	リ
サク	イヅ	タリ	チカシ	メヅ	アフ	リ
サク	イヅル	タル	チカシキ	メヅル	アフ	ル
サケ	イヅレ	タレ	チカシケ	メヅレ	アヘ	レ
サケ	イデ	タレ	○	メデ	アヘ	レ

(二六) 左ノ文中活用スル語ヲ取出デテ、ソノ活用表中ノ何形ナルカヲ記セ。



人は愛敬ありて言葉多からぬこそよけれ

(昭三 三高)

あり	アラ	アリ	アリ	アル	アレ	アレ	連用形
多から	ーラ	ーリ	ーリ	ール	ーレ	ーレ	未然形
ぬ	ズ	ズ	ズ	ズ	ネ	○	連體形
よけれ	ヨク	ヨク	ヨシ	ヨキ	ヨケレ	○	已然形

(二七) 左ノ文中ニ於ケル動詞ノ活用ヲ圖示シカツ傍線ノ部分ヲ解釋セヨ。

源氏はを見て種々の評定あり是をば射るべきか射まじきかと射よといふ人もありな射そといふ者もあり是程に感ずる者をばいかゞ情なく射るべき扇をだにも射る程の弓の上手なれば況して人をば外すべしとはよも思はじなればな射そといふ人も多し

(昭三 福岡高校)

見	ミ	ミ	ミル	ミル	ミレ	ミ
あり	アラ	アリ	アリ	アル	アレ	アレ
射る	イ	イ	イル	イル	イレ	イ

(乙) 三、誤謬訂正に關する問題

(一) 左ノ文章中ニ誤謬アラバ理由ヲ具シテ訂正スベシ。

幾度か苦心を重ねて遂に未曾有の研究を成せし人のいまだ發表して大に世に知らるゝにいたらずしてたちまちに鬼籍に入ることゝ成れりしこそ哀むべく悲むべきことなりける。

(昭五 二高)

「成せし」「成しし」と改む 成サシススセセとサ行四段の連用形「シ」から時の助動詞「シ」につづいたのである。但し「成せし」は文法上の許容事項の一つとなつてゐる。

前篇「百二十一」を見よ。



終りはこそその結であるから「なりけれ」と訂正する

(二) 左ノ文中ノ文法上ノ誤謬ヲソノ左側ニ訂正シ且ツソノ理由ヲ示セ。

いつこゝを立ち去りたりやと何人に問はるゝとも必ずそれに答ふるな。(文語)

(イ) るか (ロ) 問はるとも (ハ) 答ふな (昭五三高)

(イ) 疑問の語の下には「か」を用ゐるを正しとする。前篇「百五十六」。

(ロ) 「とも」は動詞、受身使役の助動詞の終止形に接するのを正しとする。但し(イ)(ロ)ともに文法許容事項である。「百五十八」。

(ハ) 禁止の「な」は動詞の終止形(ラ變に限り連體形)に接するのが正しい。連體形に接するのが誤である。「百四十二」。

(二)(B) 左ノ文ニ誤アラバ正セ。

そ。ういふ事は覺へておくように注意し様と思ふ

(昭五 七高)

さ。う 覺えて おくやう 注意しよう

(三) 左ノ文ニ誤アラバ正シ且其ノ理由ヲ述ベヨ。

(イ) 早く起きる人は多くは早く寝ぬる人なり

(ロ) 久しぶりに故郷に歸れば見る物聞く物皆なつかしし

昭五 東京高校

(イ) 「起きる」は口語ゆゑ「起くる」と訂正する。

(ロ) 「なつかしし」は文法上の許容、正しいのは「なつかし」で、これは志久活形容詞の終止形である。前篇「百四十七」を見よ。

(昭三 松本高)

(四) 次ノ文中誤アラバ正セ。

人人は逃げやうとあわててゐるやうだがもう遅い多分逃げらるまい

訂正 よう みる られまい

(五) 次ノ文ヲ平易ナ口語文デ解釋シ、モシ文法ノ誤ガアツタラ正セ。(昭三 姫高)

海に向ひたる家に宿れば磯邊に寄する波の音も身の上にかかるやうに覺えて夜もすがらねられぬ  
更にまどろむ間だになかりつる草の枕のまるぶしならば寢覺ともなき曉の空に出でぬ  
「ぬ」を「ず」とする「ならば」を「なれば」とする。

(六) 左ノ文中、誤ノ箇所アラバ訂正シ、其ノ理由ヲ簡單ニ説明セヨ。

(イ) 氣の合ふた者四五人ぐらいで行こうじゃないか。(口語文)

(ロ) 多少の差支はあるとも、約束を重むじて、時刻におくるゝな。(文語文)



(ハ) そうしてゐるうちには、身も心も打込むようになりそうなのだ。(口語文)(昭五高知高校)

(イ) 「氣のあつた」と訂正する。音便でもとは「合うた」と書いたが、促音便の方が標準語である。「四五人ぐらゐる」假名遣の誤であるから訂正する。「行かうぢや」と訂正する。「行かん」のう音便が口語になつたのである。「ぢや」は「では」の轉化したものである。

(ロ) 「差支はありとも」「とも」は終止形を受ける。連體形に接するのは許容。「重んじて」「重みして」の撥音便。「おくるな」禁止の「な」は終止形に接する。連體形に接するのは誤で、口語から混同して來たことと思ふ。

(ハ) 「さう」「打込むやう」「さうなものだ」上の「さう」は副詞「さ」(然)を延ばしていつたのである。「やう」は様の意である。下の「さう」は接尾語で、「さま」が訛つて出來た語である。

(七) 左記五編ノ文ヲ訂正改削シテ正シキ文トセヨ。

(イ) 餘する所なく採録せり。

(ロ) 俯仰天地に恥づところ無し

(ハ) 人を呪へば穴二つといふ諺あり

(ニ) 是は右大將頼朝とは我が事なり

(昭五 東京商大豫科)

(ホ) 今回の御註文に限り前金を要せずとも宜しく候

(イ) 餘す所なく採録せり。(ロ) 俯仰天地に恥づるところ無し。(ハ) 人を呪へば穴二つといふ諺あり。(ニ) 右大將頼朝とは我が事なり。(ホ) 今回の御註文に限り前金は頂かずとも宜しく候。

(八) 左の文中に誤あらば正せ。

(1) 是非この書を用ゐるよう忠告しやう。

(2) よく見物して行きましよう

(3) 此處に塵芥を捨つるべからず

(4) 榮華に慣れれば榮華なし

(昭五 金澤高工)

(1) 用ゐるやうに忠告しやう。(2) 行きませう。(3) 捨つべからず。(4) 榮華に慣るれば榮華なし。原文は口語である。

(九) 次ノ各項ノ下段ニソレゾレ上段ノ文意ヲ平易ナル口語ニ譯シテ記入スベシ。但シ問題ノ文中若シ文法上誤謬アルモノアラバコレニ對シテハ口語譯ヲ記サズシテソノ文法上ノ誤謬ヲ修正スベシ。



- (1) 易りゆく世のさがなればことのははた神代のまゝなるべきにはあらず
- (2) 若きみ心にはかゝるためしもありがたくやおほすらむ
- (3) 近代の生活は絶えざる過程のうへに意義と價值とを有す
- (4) 將來この研究盛に興りて遂にその本質の究明せられしには天下の文運を刺戟すことけだし尠少にあらざるべし

(昭五 國學院大學豫科)

- (1) 易りゆく世のさがなればことのははた神代のまゝなるべきにもあらず
- (2) 若きみ心にもかゝるためしはありがたくやおほすらむ
- (3) 近代の生活は絶えざる過程によりて意義と價值とを有す
- (4) 將來この研究盛に興りて遂にその本質の究明せられんには天下の文運を刺戟することけだし尠少にあらざるべし

(一〇) 次ノ文中文法上ノ誤アラバ之ヲ正シ且ツソノ理由ヲ示セ。

春としいへば若きも老ひたるもあくがれ心地に堪えやらでみな行樂の人となるぞ面白し

(昭五 京城帝大豫科)

「老いたるも」ヤ行上二段の連用形であるから。「堪へやらで」ハ行下二段の連用形。「なるぞ面白

き」「ぞ」の係は連體形で結ぶ。

(一一) 左ノ文章中文法上ノ誤アラバ之ヲ正シ、且ツソノ理由ヲ附記セヨ。

こうゆふ過ちを犯そうとは思はなかつた。これから再びくり返さないように氣をつけやう

(昭五 京都府立醫科大學豫科)

かういふ過を犯さうとは思はなかつた。これから再びくり返さないやうに氣をつけよう。

「かく」のう音便である。「言ふ」である。轉來名詞で普通送假名をつけない。「犯さん」のう音便から出來た口語である。「ないやうに」は、「無い様に」といふ字音から生じた語で、ここでは「しかあれかしと希望するにいふ語、「に」を伴つていふ。室町時代狂言などから盛につかふやうになつた。「氣をつけよう」決意の助動詞また未來の助動詞ともいふ。四段の下には「う」その他の動詞には「よう」がつく。「つけ」は下一段でその下に「よう」がついたのである。

(一二) 左ノ文ニ誤アラバ訂正セヨ (但シ説明ヲ要セズ)。

(イ) 明日雨ふれば運動會を延期すべし

(ロ) 使命を完ふして歸るでしよう

(ハ) そうなればかうしやうと考える

(昭五 東京高等師範學校)



(イ) 雨ふらば (ロ) 完うして歸るでせう (ハ) さうなればかうしようと思へる

(一三) 誤ヲ正セ (理由ヲ記スニ及バズ)。

(イ) 御見舞を辱ふし感謝に絶えず

(ロ) 負うた子に教えられて淺瀬をわたる

(昭五 廣島高等師範學校)

(イ) 辱うし感謝に堪へず。(ロ) 負うた子に教へられて淺瀬をわたる。

(一四) 次ノ文ニ文法上ノ誤アラバ正シ且ツソノ理由ヲ説明セヨ。

(一) 誓ふて艱苦に堪へ未來の大成を期せん

(二) 第一鈴にて用意を整ひ第二鈴にて試験場に入るべし

(三) 鎌倉に遊びしは久しく以前のことなりき

(昭四 東京高校)

(一) 「誓うて」と訂正する「誓ひて」のう音便である。

(二) 「用意を整へ」とする。他動詞をつかふべきところである。

(三) 「久しき」と訂正する。以前に係るから「久しく」といふ副詞では誤で、形容詞の連體形にすべきである。

(一五) 左ノ文中ニ誤アラバ之ヲ正セ (正誤ノ理由ハ説明スルニ及バズ)。

(イ) 其の身を修めむと欲する者は先ず其の心を正しふする可し

(ロ) 若し之を改めざれば後に悔ふることあり

(ハ) たとひ一度失敗したれども決して初志を棄てること勿れ

(昭四 東京高等師範學校)

(ニ) 豈圖らんや今日君と相會することを得たり

(イ) 先づ正しうす可し。(ロ) 改めずば後に悔ゆることあらん。(ハ) 失敗したりとも決して初志を棄つること勿れ。(ニ) 相會することを得んとは。

(一六) 次ノ文章中文法上ノ誤アラバ正シ且其ノ理由ヲ説明セヨ。

(イ) 春は馥郁爛漫たる花を咲かせ秋は多漿美味なる實を結ぶ樹木も、四時枝に鋏を入れ根に培へばこそ花實共に愈其の美を増し其の量をも増すなり

(ロ) 仁和寺にある法師、年よるまで、石清水を拜まさりければ、心うく覺へて、ある時思ひ立ちて只一人、かちより詣でけり

(昭四 海軍生徒兵經學校)

(イ) 「増すなれ」と訂正する。理由は上に「こそ」とある結は已然形を要する。(ロ) 「覺えて」ヤ行下二段連用形である。

(一七) 左ノ文中ノ文法上ノ誤謬ヲソノ左側ニ訂正シ且ツ餘白ニソノ理由ヲ記セ。



(イ) 始はつらしとも練習を怠らねば終には失敗を免ることを得べし(文語)  
 (ロ) 君の思ふやうに改めささうとしても彼はなかなか承知すまい(口語) (昭四 三高)  
 (イ) 「つらくとも」と訂正する。「とも」は形容詞の連用形を受ける。「つらくありとも」の略である。「怠らすば」これは未定のことをいふ場合である。下に「得べし」と應じてゐるのでわかる。「ねば」は已然形に「ば」がついたので誤である。未然形の「ず」に「ば」をつけなくてならぬ。「免るることを」とする。下二段連體形である。  
 (ロ) 「改めさせよう」と訂正する。使役の助動詞「させ」が未然形「改め」に接し、その下に決意(未來)の助動詞「よう」が接したのである。「承知しまい」これは關東の言ひ方で、口語サ變の未然形「シ」に「マイ」がついたのである。「マイ」は四段には終止形から接するが、他の動詞では未然形に接する。

(一八) 次ノ文ノ誤ヲ正セ(理由ハイラス)。

〔例、人約束を違ふる時は信用を失ふべし〕

- (ウ) 水を飲むで源を思ふは人情なり
- (エ) 夕飯を終つたら散歩にでかけましよう

(昭三 廣高師)

(ウ) 水を飲んで源を思ふは人情なり

(エ) 夕飯を終へたら散歩にでかけませう

(一九) 左ノ文ニ誤アラバ正シ且ツ理由ヲ説明セヨ。

人如何に笑うとも、自ら守るところ堅く、行、道に違わさらむには、何の恥する事かこれあらめ

(昭三 東女高師)

「笑ふとも」と訂正する。「とも」は動詞の終止形に接する。「笑ふ」は八行四段活用でその終止形は「笑ふ」である。「違はさらむ」と訂正する。八行四段の未然形である。「恥づる」ダ行上二段の連體形「これあらむ」とする。「こそ」の結の場合は已然形の「め」であるが、ここは「か」の結で連體形である。

(二〇) 次ノ文章ニ誤アラバ訂正セヨ。

- (イ) 復習を終へて後に遊ばん
- (ロ) 品物に手を觸るゝべからず
- (ハ) 物のあはれは秋こそまさる
- (イ) 誤が無い。(ロ)「觸るべからず」「べからず」は終止形(ラ變のほかは)を受けるのである。

(昭三 高校入學資格試験)



(ハ) 「まされ」「こそ」の結は已然形である。

(二一) 次ノ文中誤アラバ正セ。

國法を犯すものは罪さむ

正成こそ古今に稀なる忠臣ならむ

(昭三 神宮皇學館)

「罪せむ」サ變未然形から未來の助動詞「む」に接したのである。「ならめ」とする。「こそ」の結は已然形である。「む」の終止形も連體形も「む」で、已然形は「め」である。

### (乙) 四、文章法に關する問題

(一) 文主ト叙述語トヲ指摘スベシ。

知らざる人の批評は如何にもあれ。苟くも専門家としてはかばかり分明なることの所置を猶豫し得べきにあらず

(昭五 二高)

(備考) 文主トハ主語ノコトデアル。

文主

叙述語

文

主

叙述語

知らざる人の批評は如何にもあれ。苟くも専門家としてはかばかり分明なる事の所置を猶豫し得べきにあらず

きにあらず。

(二) 左ノ文ノ主語ト述語(説明語)トヲ指摘セヨ。

花の咲いた木の下に人が大勢集つて居る

(昭五 七高)

主語 述語

主語

述語

花の咲いた木の下に人が大勢集つて居る。上は句(「クローズ」)の中の主語と述語とである。

(三) 左ノ文ノ主語ヲ右傍ニ線ヲ施シテ示セ。

(イ) 優勝旗を會長が授與せられた

(昭五 東京高校)

(ロ) 向ふに見えるのが私の學校です

(イ) 優勝旗を會長が授與せられた。

(ロ) 向ふに見えるのが私の學校です。

(四) (イ) 次ノ文ノ主語(又ハ主部)ニ——ヲツケモシ句(節)ヲ含ンデキタラソノ句(節)ノ

主語ニ——ヲツケ。

(ロ) コノ文ノ構造上ノ種類(單文、複文、重文)ヲ指示シテクレタマヘ。(昭五山口高校)  
お手々 つないで 野道をゆけば みんなかはい、小鳥になつて 歌をうたへば 靴が鳴る

二七七







しからざるを知る。

(九) 左ノ述語(説明語)ヲ用ヒテ三ツノ短文ヲ作り且ツノ差異ヲ説明セヨ。

見奉る、見侍り

見給ふ

(昭三 東高師)

帝の御敷きを見奉る人さへ露けき秋なり。

右の奉るは自分の動作が他へ及ぼす時に添へていふ敬語である。かういふのを關係敬語と名をつけてゐる學者がある。

行列の通るを見侍りつ。

右の「侍り」はもと自分の存在について卑下謙遜の意を表すのであつたが、一轉して對話敬語と稱し、對話上言葉を丁寧にするのに用ゐるもので、口語の「マス」に當る。自分の動作にも又對者の動作にも乃至は第三者の動作にもつく。

賀茂祭の行列を見給ひしか。

右の「給ふ」は尊他敬語と稱し、他人の動作を表す動詞に添へて敬意を表す助動詞である。

(一〇) 次ノ文ノ主語(又ハ主部)ニ——ヲツケヨ(句ヲ含ンデキルモノハ、ソノ句ノ

主語ニ——ヲツケヨ)。

[例] 舟子ども潮満ちぬといふ。]

(昭三 廣島高師)

(ア) 規模の雄大にして建築の宏壯なる、實に天下の冠たり

(イ) 今年は枝が折れるほど實がなりました

(一一) 1 左ノ歌ニツキテ文ノ構成ヲ説明シ

2 コノ歌ノ中ニアル總テノ動詞ノ終止形(文語、口語兩様共)ヲ表ニシテ示セ。

すくく〜と生ひたつ麥に腹すりて燕とびくる春の山畑

形 修 句 (クローズ)

副 修 語 (とびくるに係る) 主語 述語 主語

すくく〜と 生ひたつ 麥に 腹 すりて 燕 とびくる 春の山畑(よ)

副修語 形修語 補語 客語 述語

かういふ感動文は形修語と主語とだけであるのが普通で述語を言はないところに味がある。

副修語の中の述語「すり」の主語は「燕」であつて倒置の關係上下に來てゐる。この副修語は飛び來る状態をいつたもので、燕が麥に腹をすつて飛んで來る春の山畑よと感動を含めたのである。



					終止形
				文語	口語
		生ふ	立つ	する	とぶ
		生ヒル	タツ	スル	トブ
					クル

(一二) 次ノ文ニ省略サレタ語ガアレバコレヲ補ヒ且排列ノ順序ヲ通常ノ位置ニ正セ。

もしく龜さん龜さんよ 世界のうちにお前ほど あゆみののろいものは無い どうしてそんなにのろいのか

(昭三 水戸高校)

もしく龜よ龜さんよ。お前ほどあゆみののろいものは、世界のうちに無い。「お前は」「歩みが」(主語) 叙述句の主語 どうしてそんなにのろいのか。

(一三) 次ノ文中主語トソレニ對スル述語(説明語トモイフ)トヲ指示セヨ。

(昭三 松本高校)

秋は蜩の聲耳に充てりうつせみの世を悲しむかと聞ゆ

主

述

秋は 蜩の聲 耳に 充てり。

主

述

〔それは〕うつせみの世を悲しむかと聞ゆ。



### (丙) 昭和二年度以前の問題類別の解説

#### (丙) 一、總演習

(一) 動詞ノ活用ヲ識別スル法ヲ述べ次ノ動詞ノ何活用ナルカヲ示セ。

持つ、垂る、集まる

(大正二 陸經理)

「ず」又は「ん」をつけて見て

ア韻が出る語尾をもつと……………四段ナ變ラ變

イ韻……………上二段 上一段

エ韻……………下二段 下一段 サ變

オ韻……………カ變

右のうち——をつけた活用はそれに屬する語が少いから、すぐ覺えられる。

「持つ」は「ず」をつゞけると「持たず」ア韻ゆる四段活用。「垂る」は「ず」をつけると「垂れず」エ韻ゆる下二段活用。「集まる」は「ず」をつけると「集まらず」ア韻ゆる四段活用である。

(二) 動詞正格活用ト變格活用トノ區別ヲ説明セヨ。

(大正四 專檢)

四段、上一段、下一段、上二段、下二段の五種を正格活用とし、ナ行、ラ行、カ行、サ行の四種を變格活用としてゐる。變格といふわけはナ行變格は四段に比べて「死ぬる」「死ぬれ」「往ぬる」「往ぬれ」のやうに「ル」「レ」が餘計に添つてゐることが二段活用に似てゐる。四段とちよつて變つた格であるからのこと。

ラ行變格も終止形がイ韻である一點だけ四段とちがふ。カ行變格は上二段に比べてオ韻が二つ入つて三段活になつてゐる點が變つた風である。

起キ	キ	ク	クル	クレ	キ	上二段
來コ	キ	ク	クル	クレ	コ	カ變(三段活)
合 <small>あは</small> セ	セ	ス	スル	スレ	セ	下二段
シ	シ	ス	スル	スレ	セ	サ變(三段活)

サ行變格はやはり三段活で下二段にくらべて、連用形が四段のやうに「イ」韻になつてゐる。つまり變格とは四段の別格二種と三段活の二種とである。

(三) 文語ノ變格活用動詞ヲソノ口語ト對照シテ活用表ヲ作レ。(大正九 東高師)







「なす」に敬語の「る」がついた語。文語下二段。口語四段である。狂言には「御出でなされた」「御褒めなされませ」「お助けなされて下されい」「な這りなされ」連用形を見ると文語が残つてゐる。しかし江戸期に入つて終止形連體形は四段にかはつてゐる。「祈念をしなざるよりは」かういふ用法は元祿の前の天和貞享の頃高崎城主松平信興の作なる雑兵物語といふ書に見えてゐる。下二段の活用で相當長い間用ゐられて現今のやうに四段になつたらしい。

(七) 「言ふ」「申す」「のたまふ」ノ三語ニ就キ例ヲ擧ゲテ其ノ用法ヲ説明セヨ。

(十一 東高師)

かくいふは悪七兵衛景清よ

右のやうに「いふ」は「ものをいふ」「口をきく」といふことで、上下尊卑の關係が無い。敬語でない其の儘の動詞である。

かく申すは餘の儀では候はず

謙遜語(關係敬語)の動詞である。先方主として目上の人に關係してゐる點から言ふのは自分の動作ではある。之を謙遜し間接に先方を敬ふので、言上する意である。又古くから次のやうに准助動詞としての用法もある。

ソラトア鳥ニナリタイヨ オ送りシテ

天とぶや鳥にもがもや都まで送りまをして (萬葉五)

右は「送る」といふ動詞の下に添へてたゞ敬ふ意を表した准助動詞で奈良朝時代から用ゐられてゐる。

我が父常にかくのたまひき

これは「仰せられる」といふ意で尊敬語である。

(八) 左ノ名詞ヨリ規則動詞ヲ作り、ソノ活用ヲ示セ。

- (一) さみだれ(五月雨) (二) もみぢ(紅葉) (三) ひとりごと(獨語)
- (四) まつりごと(政事) (五) もんだふ(問答) (昭二 東商大豫科)

(一)	さみだる	レ	レ	ル	ルル	ルレ	レ
(二)	もみづ	ダ	ヂ	ヅ	ヅ	デ	デ
(三)	ひとりごつ	タ	チ	ツ	ツ	テ	テ
(四)	まつりごと	タ	チ	ツ	ツ	テ	テ
(五)	もんだふ	ハ	ヒ	フ	フ	ヘ	ヘ



又「もみぢ」は次のやうに上二段にもいふ。これは四段よりも新しく平安朝に入つてから出来たのである。

も	み	づ	ぢ	ぢ	づ	づル	づレ	ぢ
---	---	---	---	---	---	----	----	---

(九) 次ノ文中ヨリ音便ヲ指摘シ且之ヲ説明セヨ。

(イ) 筏を僦うて筑水を下る

(ロ) 世に處するも亦難いかな

(ハ) 且に星を戴いて出で夕に月を踏んで歸る

(ニ) そこに立つては暗うございます

(八 専檢)

(イ) 「僦ひて」とハ行四段連用形に「て」の接したのである。それをう音便にいふ。(ロ) 「難きかな」形容詞の連體形のイ音便である。(ハ) 「戴きて」カ行四段連用形の動詞のイ音便「踏みて」マ行四段連用形の撥音便である。(ニ) 「立ちて」タ行四段の連用形の促音便。「ち」をツといふ。「暗く」形容詞の連用形のウ音便。「ござります」ラ行四段の連用形のイ音便である。

『備考 音便は形容詞にイ音便、ウ音便の二種、動詞にはこの外に撥音便、促音便もあつて四種ある。動詞では

連用形に限つて四段・ナ變・ラ變に於てある。他の動詞、他の活用形に無い。形容詞はすべてに亘つて連體形と連用形とに於て行はれる。』

(一〇) 次ノ語ノ活用ヲ記セ。

- 1 射る 居り 据う 堪ふ (以上動詞)
- べし らし す る (以上助動詞)

(大正元 女高師)

2 堪有 報用 來

(七 専檢)

3 似報 學榮 顯

(十一 大外語)

4 綻夥 懲用 考淡 得痒 貫掩

(十三 東高師)

5 有り あたたかし

(昭二 神宮皇學館)

6 加ふ 變り 美し 心す 植う

(昭三 専檢)

射る	イ	イ	イル	イル	イレ	イ
居り	チラ	チリ	チリ	チル	チレ	チレ
据う	スエ	スエ	スウ	スウル	スウレ	スエ



		(三)										
用		懲	夥	綻	顯		榮	學	報	似		
モチヒ	モチキ	コリ	オビタダ シク	ホコロバ	ホコロビ	アラハサ	アラハレ	サカエ	マナバ	マナビ	ムクイ	ニ
モチヒ	モチキ	コリ	オビタダ シク	ホコロビ	ホコロビ	アラハシ	アラハレ	サカエ	マナビ	マナビ	ムクイ	ニ
モチフ	モチキル	コル	オビタダ シ	ホコロブ	ホコロブ	アラハス	アラハル	サカユ	マナブ	マナブ	ムクユ	ニル
モチフル	モチキル	コルル	オビタダ シキ	ホコロブ	ホコロブ	アラハス	アラハル	サカユル	マナブ	マナブル	ムクユル	ニル
モチフレ	モチキレ	コルレ	オビタダ シケレ	ホコロベ	ホコロブ	アラハセ	アラハル	サカユレ	マナベ	マナブレ	ムクユレ	ニレ
モチヒ	モチキ	コリ	○	ホコロバ	ホコロビ	アラハセ	アラハレ	サカエ	マナバ	マナビ	ムクイ	ニ

『備考 用に二種ある。ワ行上一段の方が古く、ハ行上二段は新しいのである。』

				(二)					(一)				
來	用	報	有	堪	る	す	らし	べし	堪ふ				
コ	モチヒ	モチキ	ムクイ	アラ	タヘ	レ	セ	○	ベク	タヘ			
キ	モチヒ	モチキ	ムクイ	アリ	タヘ	レ	セ	○	ベク	タヘ			
ク	モチフ	モチキル	ムクユ	アリ	タフ	ル	ス	ラシ	ベシ	タフ			
クル	モチフル	モチキル	ムクユル	アル	タフル	ルル	スル	ラシ	ベキ	タフル			
クレ	モチフレ	モチキレ	ムクユレ	アレ	タフレ	ルレ	スレ	ラシ	ベケレ	タフレ			
コ	モチヒ	モチキ	ムクイ	アレ	タヘ	レ	セ	○	○	タヘ			



		(四)				(五)		(六)	
考	淡	得	痒	貫	掩	有り	あたたか	加ふ	有り
カンガへ	アハク	エ	カユク	モラハ	オホハ	アラ	アタタカク	クハへ	アラ
カンガへ	アハク	エ	カユク	モラヒ	オホヒ	アリ	アタタカク	クハへ	アリ
カンガフ	アハシ	ウ	カユシ	モラフ	オホフ	アリ	アタタカシ	クハフ	アリ
カンガフル	アハキ	ウル	カユキ	モラフ	オホフ	アル	アタタカキ	クハフル	アル
カンガフレ	アハケレ	ウレ	カユケレ	モラへ	オホへ	アレ	アタタカケレ	クハフレ	アレ
カンガへ	○	エ	○	モラへ	オホへ	アレ	○	クハへ	アレ
植う	心す	美し	有り	加ふ	あたたか	し	植う	心す	美し
ウエ	ーセ	ク	アラ	クハへ	アタタカク	ク	ウエ	ーセ	ク
ウエ	ーシ	ク	アリ	クハへ	アタタカク	ク	ウエ	ーシ	ク
ウウ	ース	ウ	アリ	クハフ	アタタカシ	シ	ウウ	ース	ウ
ウウル	ースル	キ	アル	クハフル	アタタカキ	キ	ウウル	ースル	キ
ウウレ	ースレ	ケ	アレ	クハフレ	アタタカケレ	ケ	ウウレ	ースレ	ケ
ウエ	ーセ	○	アレ	クハへ	○	○	ウエ	ーセ	○

(一一) 左ノ來ノ字ニ振假名ヲ附ケテ文法上ノ説明ヲ加ヘヨ。

こゝに來なば、こゝに來た、こゝに來し時

來なば 「な」は時の完了の助動詞「ぬ」の未然形であつて動詞の連用形に接する。

來た 「た」時の完了の助動詞でこれも連用形に接する。

來し 「し」は時の過去の助動詞「き」の連用形で、カ變につゞく時に規則通り連用形でつ

ゞけて「キシ」といふ外に、慣例として未然形からもつゞけて「コシ」ともいふ。恰も口語で

「コヨウ」「キヨウ」「コナイ」「キナイ」未來打消が未然連用の兩方に接するやうなものである。

(一二) 使役ノ助動詞ヲ擧ゲ其ノ文語及ビ口語ノ對照活用表ヲ作レ。(十 東女高師)

す	セル	さす	サセル	しむ
せ	セ	させ	サセ	しめ
す	セル	さす	サセル	しむ
する	セル	さする	サセル	しむる
すれ	セレ	さすれ	サセレ	しむれ
せ	セ	させ	サセ	しめ



右平假名は文語で、片假名は口語である。文語「しむ」に對する口語は消滅したのである。

(一三) 助動詞「す」「さす」「しむ」ノ活用ヲ記シ、且動詞トノ接續及ビソレニヨリテ生ズル意義ヲ記セ。

(十一 女高師)

す	セ	セ	ス	スル	スレ	セ
さす	サセ	サセ	サス	サスル	サスレ	サセ
しむ	シメ	シメ	シム	シムル	シムレ	シメ

四段 行か

ナ變 死なす

ラ變 有ら

上二 報い

下二 加へ

上二 着

下二 蹴

せ給ふ又せらる。

させ給ふ。又させらる。

カ變 來

サ變 せ

「す」は右に示す通り未然形がア韻をもつ所の四段、ナ變、ラ變からつき「さす」は其他の動詞につき「しむ」はすべての動詞からつく。「す」「さす」「しむ」は動詞の未然形に接し、使役の意義を生ぜさせ、又「給ふ」「らる」等と結びついて敬語の意義を生ぜさせるのである。

(一四) る、らる二助動詞ハ幾種ノ意義ニ用ヒラルルカ例ヲ擧ゲテ説明セヨ。(七 專檢)

受身

同

可能

同

自發

同

敬語

同

父は神戸に向つて出發せらる。

君も成功を危ぶまる。

父母の事のみ案ぜらる。

彼の心の中思ひやらる。

六尺の屏風も躍れば飛び越えらる。

五里の道は徒歩にても行かる。

恩を仇にて報いらる。

敵に陣地を奪はる。



右の例のやうに四種に用ゐられる。

(一五) 推量ヲ表ハス助動詞ヲ列舉シテ其用法ヲ記セ。

(七 女高師)

明日も來らざるべし。

今は野邊の千草も咲きぬらん。

翁と媪と物語すめり。

花や今は盛ならまし。

かゝる山里にも住む人あるらし。

今日は雨降ることあるまし。

右の「べし」「らん」「めり」「まし」「らし」「まじ」「は事柄の現在に屬するものを推量又は想像する助動詞で、「まし」は未然形に其他はみな終止形につく。但しラ變及び同系の語には連體形につく。この外に古い語で形容詞の語幹につく「けむ」といふのがある。「全けむ」「よけむ」「からむ」の約轉である。

『註 約轉といふのは語がつまつてそれから變つたのをいふ。「から」がつまると「か」となり、「か」が「け」に轉じたのである。』

べし	ベク	ベク	ベシ	ベキ	ベケレ	○
べかり	ベカラ	ベカリ	ベカリ	ベカル	ベカレ	○
らん	○	○	ラン	ラン	ラメ	○
めり	○	メリ	メリ	メル	メレ	○
まし	○	○	マシ	マシ	マシカ	○
らし	○	○	ラシ	ラシ	ラシキ	中古語
まじ	マジク	マジク	マジ	マジキ	マシケレ	上古語
けん	○	○	ケン	ケン	ケメ	○

右のうち「まじ」は推量をしながら打消を表す。この外に未來の助動詞「ん」は未然形に接する用語で、推量を表すこともある。

既に卒業しけんよ

櫻花咲きにけらし

右の「けん」「けらし」は連用形について、事柄の過去に屬するものを推量又は想像する助動詞で、



上に「て」「に」「たり」をつけても用ゐられる。活用は右に示した「けん」「らし」「らしい」に同じい。

風吹きぬべし。(フキサウダ)

明日若菜つみてん。

山はさけ海はあせん。

右の「ぬべし」「てん」「なん」は實際にない事又は未來の事を推量若しくは想像する助動詞で、活用は「ぬべし」は「べし」に「てん」「なん」は「けん」に同じい。

口語における推量の助動詞は「う」「よう」「だらう」「でせう」「らしい」は現在の推量に、「たらう」は過去の推量に用ゐる。「らしい」は次の通り活用する。その他は終止形と連體形との二活用しかない。

らしい	ラシク	ラシク	ラシイ		
らしか〇	ラシカラ	ラシカリ (ツ)	〇	〇	〇

『註 連用形からつゞく「さうだ」と連體形(終止形)からつゞく「さうだ」「やうだ」を入れる説もある。

風ガ 吹キ サウダ。 連用形につゞく

風ガ 吹ク サウダ。 連體形につゞく

風ガ 吹ク ヤウダ。 同上

さうだ	ダラ(ウ)	ダツ(ダ)	ダ(ヨ)	ダ(カ)	
やうだ	ダラ(ウ)	ダツ(ダ)	ダ(ヨ)	ダ(カ)	

右は連用形に接した「サウ」を接尾語とし、其他の「サウ」「ヤウ」を名詞と見、下の「ダ」を指定の助動詞と見るのが穩當である。』

(一六) 「書けり」ナドノ「り」ハ如何ナル種類ノ語ニツヅキ如何ナル活用ヲスルモノナルカ。(大正二 東高師)

「り」は時の助動詞で動詞の四段活用の已然形サ變の未然形に限つて接続し、その活用は

らばわが冠を洗はん。  
 りし時もありけり。  
 り。  
 滄浪の水清め  
 ることもあり。  
 れば底明かに見ゆ



一れ。

り	ラ	リ	リ	ル	レ	レ
---	---	---	---	---	---	---

今は右の第三活・第四活だけ用ゐられてゐる。

(一七) 左ノ施線ノ意義ヲ文法上ニヨリ明ラカニ記セ、但シ簡單ナラムコトヲ要ス。

(イ)

- (2) 長官我れに全權を委任せらる。
- (2) 我れ長官より全權を委任せらる。

(ロ)

- (1) 大元帥陛下親しく之を統監せさせ給ふ。
- (2) 特に某將軍を遣はして之を督勵せさせ給ふ。

(ハ)

- (1) 我れとても勉めば熱達せらるべし。
- (2) 汝等進んで敵を破るべし。

(二) 陸士)

(イ)の(1)は敬語(2)は受身。(ロ)の(1)は敬語(2)は使役。(ハ)の(1)は可能(2)は命令。

(一八) 例ヲ擧ゲテ敬語ノ助動詞(文語)ヲ説明セヨ。

(九 東高師)

二柱の神天の浮橋に立たし給ふ。

君も覺束なく覺さる。

先生は米國へ留學せらる。

畏くも寒夜に御衣を脱がせ給ふ。

豫ねての本望を遂げさせらる。

菅公明石の驛にて詩を作らしめ給ふ。

上古では重い尊敬を表す時は「給ふ」を用ゐ、軽い場合には「す」をつかつた。それ等は四段に活用する。

す	サ	シ	ス	セ	セ
給ふ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ヘ

刀を「みはかし」弓を「みとらし」といふのは連用形の「シ」が名詞になつたのである。「す」は中古以前に廢れた。その代り中古から受身の「ル」「ラル」使役の「ス」「サス」「シム」の五つが尊敬を表す助動詞として發生した。但し使役から轉じたものは單獨に用ゐられなく、他の語と結びついてつかはれる。「給ふ」はその後ずつと優勢で今でも學生言葉として、命令形だけ口語としてつかは



れる。四段の「給ふ」に對して下二段の「給ふ」は謙遜の意に、中古から發生した。いかで尋ねんと思ひ給ふるぞよ。

給ふ	へ	へ	フ	フル	フレ	へ
----	---	---	---	----	----	---

關係敬語として「奉る」「聞ゆ」「聞ゆ」對話敬語として「侍り」「候」が動詞から轉じて來た。

この大きさまで養ひ奉る志おろかならず。

竹の中より見つけ聞えし君ぞかし。

經驗をつみ給はば思ひ知り侍りなん。

只今參上仕るべく候。

「奉る」は四段「聞え」下二段「侍り」ヲ變「候」四段に活用する。「侍り」は中古「候」は近古近世に多く用ゐられた。この外「まるらす」「おはす」「おはします」「申す」等の動詞も準助動詞のやうに動詞の下に結びついて用ゐられるが、まだ一般から助動詞とは認められない。

(一九) 左ノ意義ヲ説ケ。

(イ) 御覽なさる

(ロ) 拜見いたす

(大正八 東高師)

(イ) は尊敬する意。先方を敬ふ意から先方の動作を敬ふのである。(ロ) は自分の動作を先方に關係ある所から、卑下謙遜していふのである。「いたす」は「スル」の謙遜語で、「拜見」は關係敬語で合せて謙遜語と見る。

(二〇) 「ます」「トイフ口語ノ助動詞ニツキテ知レル所ヲ述ベヨ。(明治三九 高師)

對話敬語ともいひ又鄭重の助動詞ともいふ。動詞受身可能使役敬語助動詞及び時の「テアル」「テアル」「テアル」の連用形につく。「ます」は談話の相手を敬ふので動作の主體は誰でもよく又何でもよい。「あの人がいきます」「雨が降ります」ともいふ。活用は、

ます	マセ	マシ	マス	マス	マスレ	マシセ
----	----	----	----	----	-----	-----

今でも極めて鄭重にいふ場合は、舊式の「マスル」をつかふ。命令形に二つあるうち、「ませ」の方が鄭重である。「遊ばしませ」「なさいまし」とつかふ。語原はまさ、まし、ます、ませと四段に活用した「居る」の尊敬語である。これについて異説もあるが、この説がよい。「ます」に接する助動詞は、未然には打消と未來「ません」「ませう」連用には過去「ました」終止連體には「まし」「らし」「だらう」「のだ」、等推量と指定とがつく。



(二一) 左ノ二句ノ正否ヲ記シ竝ニ其ノ理由ヲ説ケ。

雨降りぬべし。

雨降らぬべし。

(大正元 東高師)

「雨降りぬべし」は正しい。完了の「ぬ」は連用形の「降り」に接してゐる。打消「ず」の連體形「ぬ」には「なり」の外助動詞すべては接しない。「雨降らぬなるべし」といふか、「雨降らざるべし」といふのが正しい。「雨降らぬべし」は正しくない。「べし」はラ變系の外は終止形につくのであるが、「ず」からは助動詞は一切何にも接しないのである。

(二二) 次ノ口語ヲ文語ト比較シテ助動詞ノ續ケ方ヲ説明セヨ。(大正十二 東高師)

(イ) 早いからまだ起きまゝ。

(ロ) 郊外を散歩しよう。

(イ) 早ければいまだ起くまじ。

早いからまだ起きまゝ。

文語「まじ」はラ變の連體形、その他の動詞では終止形に接するのである。口語「マイ」は四段は終止形、その他の動詞では未然形に接するきまりである。それゆゑ文語では終止形「起く」から

「まじ」につゞき、口語では未然形「起き」から「マイ」につゞくのである。

(ロ) 郊外を散歩せん

郊外を散歩しよう

未來又は決意の助動詞「ん」「よう」は未然形に接するのである。文語サ變未然形「せ」から文語「ん」につゞく。口語サ變未然形に二つあつて關西系は「せ」關東系は「し」である。その「し」から「ヨウ」につゞくのである。

(二三) 次ノ動詞ニ文語デハ「まじ」口語デハ「まい」ヲツケテ見ヨ。

(文語) 降る 見る 蹴る 來 爲

(口語) 降る 蹴る 來る 爲る

(十二 廣高師)

降るまじ 見るまじ 蹴るまじ 來まじ 爲まじ

降るまい 見まい 蹴まい 來まい しまい

(二四) 左ノ句中ニアル助動詞ぬ、なむ、るノ各々異同ヲ文法上ヨリ説明セヨ。

(イ) 未だ來ぬ はや來ぬ

(ロ) 故郷に歸りなむ 故郷に歸らなむ



(ハ) 他の爲めに出し抜かる 昔しのぼる

(昭二 小樽高商)

(イ) 未だ来ぬ カ變の未然形「こ」から打消の助動詞「ず」の連體形「ぬ」につづいたのである。はや来ぬ カ變の連用形「き」から完了の助動詞の終止形「ぬ」につづいたのである。

(ロ) 故郷に歸りなむ 連用形につくのは未來完了(決意を強くいふ意)の「なむ」で、「かへりませう」の意である。故郷に歸らなむ 未然形につくのは、願望の助詞の「なむ」で「かへつてくれ」と誂<sup>あつ</sup>へる意である。

(ハ) 他の爲めに出し抜かる。受身の「る」で、上に標準の語「他の爲に」がある。昔しのぼる。自發の「る」で自然に強く制しきれぬ程に起る意である。

(二五) 次ノ問題ニ於テ「なん」ハドンナ意味ニ使ハレテアルカ。(大正十三 廣高師)

(ア) 此の人皆失せな後、我身死ぬべきに定まりたりとも……。

(イ) たゞ少し聞きて歸りなんとしつるを……。

(ウ) 燈火近くともせば今宵は燈籠にてありなん。この火消ちてよといふ。

(エ) 波風の靜かなる日も船人はかぢに心をゆるさざらなん。

(オ) 折にかなひて面白きこといひあへりとなん。

(ア) この人が皆死にゆくであらう後、未來を想像した意味である。

(イ) これから歸らうとしかけたのをいふ。未來完了で未來を強めたのである。

(ウ) 燈籠でよからう、よいだらう。推量の意である。以上三つは時稱の「なん」で未來完了である。

(エ) ゆるさないでくれ 誂の意で願望の感動助詞。

(オ) 係り詞の「なん」で下に結び詞「いふ」を省いたもの。いひあつたとまあいひますといふ意である。

(二六) 左ノ施線ノ部分ニツキテ文法上ノ差異ヲ説ケ。

1(イ) 生き残りしもの (ロ) 生きとし生けるもの

2(イ) 見るとも (ロ) 見れども

3(イ) 寒くば (ロ) 寒ければ

4(イ) 散れば (ロ) 散りなば (ハ) 散りたりせば

5(イ) 花は咲けりや (ロ) 珍らしやこの花

6(イ) 心あらむ人に見せばや (ロ) 心あてに折らばや折らむ (四一 女高師)



- (1) (イ) 過去の助動詞「き」の連體形。生き残つたものといふ意。(ロ) 語詞を整へ又は強める助詞で、あらゆる生きてゐるものといふ意である。
- (2) (イ) 未定の條件を表はす タトヒ見テモの意。(ロ) 既定の條件をいふ。見ルケレドモの意である。
- (3) (イ) 未然の言ひ方で、寒イナラバの意。(ロ) 既然の意で寒イト又は寒イカラといふことである。
- (4) (イ) 事柄の既に定まつたのをいふ「散ルノデ」又「散ルト」の意。(ロ) 事柄のまだ定まらない意、散ルナラといふこと。「散らば」を強めた言ひ方、「な」は完了「ぬ」の未然形で「強め」の役をなす。「ハ」事柄を假りに設けていふ。「せ」はサ變動詞の未然形で強勢の役をなす。散ツタトシタラの意である。
- (5) (イ) 疑問の「や」(ロ) 珍ラシヨコノ花 ロ調を整へる助詞。
- (6) (イ) 熟語を作つて「タイ」願望の助詞未然形につく。(ロ) 「ば」と「や」と二語で「ば」は接續助詞「折ルナラバ」の意「や」は疑の助詞「折ラレヨウカ」の意。

(二七) 左ノ文ニツキテ附線ノ語ヲ説明セヨ

急ぎしが及ばざりき

家の風をも吹かせてしがな

昨日こそ早苗とりしか

召されしかば参りき

何事もなかりしか

(四二 東高師)

「急ぎしが」イソイダケレドモの意。過去「き」の連體形の「し」に接續助詞の「が」がついた二つの語である。

「吹かせてしがな」吹カセタイの意。願望の助詞の「が」に過去の「し」が上について熟語となつたもの、「吹カセルヤウニナツタラナア」と未來の願を豫ねて過去に言ひ做すところから「て」の完了「し」の過去の助動詞を上にならせたのである。

「早苗とりしか」「こそ」の結の已然形。「き」「し」「しか」と活用する過去の助動詞の已然形である。

「召されしかば」同上の已然形が接續助詞「ば」につづいた用例で、召サレタカラといふ意である。「なかりしか」連體形の「し」に疑問の助詞「か」のついた二つの語である。



(二八) 左ノ文ノ意義ノ異同ヲ説明セヨ。

(イ) 太郎次郎と三郎を訪ふ

(ロ) 太郎と次郎と三郎を訪ふ

(ハ) 太郎次郎と三郎とを訪ふ

(四〇 東高師)

(イ) 太郎が次郎と共に三郎を訪ふ。(太郎が主語、次郎は補語)

(ロ) 太郎と次郎とが(二人主語である)三郎を訪ふ。

(ハ) 太郎が次郎と三郎と(補語が次郎と三郎と二人)を訪ふ。

(二九) 左ノ文ニツキテ助辭みノ用法ヲ區別セヨ。

(イ) 泣きみ・笑ひみ

(ロ) 嵐を寒み

(ハ) 高みに行きて涼みとる

(ニ) おいみいとけみ

(十四 東商大學科)

(イ) 重ね用ゐるてかうしたりあゝしたりといふ意味の接尾語で、動詞の連用形につく。(ロ) 形容詞の語幹について「が故に」の意をなす。口譯「サニ」といふ。「嵐ガ寒サニ」である。(ハ) 形容詞をつくる「み」で形容詞の語幹につく。程をいひその程の處をいふ。(ニ) 程の意で「老い」といふ連用形にいたり、形容詞の語幹について名詞をつくる。老いたのも幼いのも程々にといふ意であ

る。(イ)と(ハ)とに分れる前の原始用例である。重ねる用法と連用形につくのは(イ)の方へ發達し、形容詞「いとけし」の語幹「いとけ」について程の意を添へるのは(ハ)の方へ發達したのである。

(三〇) 反語ノ意味ヲ表ハス助詞ヲ例ヲ以テ説ケ。

(昭二 神宮皇學館)

その時悔ゆとも甲斐あらんや。

そこひなき淵やはさわぐ。

かゝる事あるべきか。

水鶏のたゞくなど心細からぬかは。

右の「や」「やは」「か」「かは」上の意を裏がへして結ぶ語で反語の助詞といふ。

(三一) 左ノ文中ノ「を」ノ用法ヲ説明セヨ。

(イ) 山を下る

(ロ) 國ヲ治む

(大正七 女高師)

(イ) 場所を示す。自動詞「下る」の動作がどこで行はれるか、その場所をいふ語の下に置いたのである。(ロ) 他動詞(治む)の目的物を示す「を」で目的格又は處置格(第四格)をつくる。(ハ) 自動詞「飛ぶ」の動作がどこで行はれるかを示すこと(イ)と同じい、地位を示す自動格



の標準を表す「を」である。

(三二) 名詞動詞が副詞トナル場合ヲ示セ。

(三九 女高師)

- 一、名詞がそのままで副詞になる。  
昔男ありけり。

「昔を思ふ」の「昔」は名詞であるが、右の例のやうな修飾性用法をなすと副詞になる。これは「今日」「明日」「春」「秋」等時を表す名詞に限るのである。

- 二、名詞が疊語になると副詞になる。下に「に」をつけることもある。  
年々歳々花相同じ。歳々年年人同じからず。  
疊もところどころ破れ損じたり。

- 三、名詞に助詞「に」「と」がついて副詞になる。  
子は誠に齊人なり。  
わざと人の言を外らす。

- 一、動詞はそのままで副詞になる。連用形からなる。  
たとへ あまり つまり

二、疊語にすると副詞になる。

しみぐ とりぐ 重ねぐ (連用形の疊語)  
泣くく ゆくく 見すく (終止形の疊語)

三、動詞に助詞をつける副詞になる。

すべて あへて 極めて 決して (連用形に「て」をつける。)  
たとへば 言はゞ 思へば (未然形や已然形に「ば」をつける。)  
みだりに しきりに (連用形に「に」をつける。)

四、動詞に「ず」(助動詞)をつける副詞になる。  
思はず 絶えず

五、動詞の連用形が接頭語をつけると副詞となる。

くりかへし思ひつゞけて歎くかな。  
うきものとおしかへし恨み給ふ。  
をりかへし御返事下され度候。

(三三) 係結ニツキテ知レルコトヲ記セ。

(大正二 東高師 七 専檢 四一 女高師)



係結に二種ある。「ぞ」「なん」「や」「か」の係結と「こそ」の係結とである。

秋の野に露ぞこほるる。

柿本人麿なん歌の聖なりける。

去年の今日を思ひや出づる。

世の中は何か常なる。

右のやうに助詞「ぞ」「なん」疑問反語の助詞「や」「か」を受ける場合には動詞・形容詞・助動詞の連體形を以て文を結ぶ慣例で、上の助詞を係詞之に應じて文を結ぶ活用言を結詞といふ。

祝ふ今日こそたのしけれ。

昨日こそさ苗とりしか。

人こそ見えね秋は來にけり。

今こそ別れめこの學びや。

實にこそ千秋の無念なれ。

右のやうに上に助詞の「こそ」を受けると下の活用言の已然形で結ぶ慣例で上の「こそ」を係詞下の活用言を結詞といふのである。

貧家に生まれたるぞ幸福なりと古人もいはれたる。

右は係詞「ぞ」の結詞を誤つた例である。「ぞ」は「幸福なる」と結ぶべきである。かういふ句(クローズ)を一つの名詞として受け留める「と」の下へは係結は及ぼさないのであるから、「たり」と結ぶのが正しい。「古人も」の「も」「藝は身を助く」の「は」をも係詞に加へ下を終止形で結ぶといふ説もある。又餘情を籠める場合は「ぞ」「なん」「や」「か」の係が無くて連體形で結ぶことがある。疑問の語「いく」「何」「誰」も係詞といふ説もあるが、これは下に「か」があるか無いとすると省いてゐるので、その「か」の係結である。係詞は助詞に限り、副詞などは呼應といふのである。

係詞があつても結ばない場合がある。

小夜千どり聲こそ近くなるみ鴻傾く月に汐やみつらん

これは地名へいひかけて「こそ」の係詞に對して結ばなかつた例である。

雪かとぞよそに見つれど櫻花折りては似たる色なかりけり

これは「ぞ」の係詞に對して結ばないで、その儘下へつゞけた例である。

これやこのゆくもかへるもわかれては知るもしらぬもあふ坂の關

これも係詞「や」の結を地名にいひかけて結ばない例である。











10 少壯の時を徒に遊び暮さば老いて後悔ゆともかひなかるべし (十 東高師)

名詞 助詞 名詞 助詞 副詞 動詞(熟語) 助詞 動詞 助詞 名詞 動詞 名詞 形容動詞 助動詞  
少壯の時を徒に遊び暮さば老いて後悔ゆともかひなかるべし。

11 (イ) 春は若草山の芝緑にもえたち三月堂二月堂霞につままれてさながら夢の如く秋は春日の社神さび手向山の紅葉夕日にはゆる様殊に見所あり

(ロ) 潮がだんくさして来て何時の間にか洲が見えなくなつた (十四 東高師)

副詞 助詞 名詞 助詞 名詞 助詞 動詞(熟語) 名詞 名詞 助詞 動詞 助動詞 助詞 副  
春は若草山の芝緑にもえたち三月堂二月堂霞につままれてさな

詞 名詞 助詞 助動詞 副詞 助詞 名詞 動詞 名詞 助詞 名詞 助詞 動詞 名詞 助詞 動詞 名詞  
がら夢の如く秋は春日の社神さび手向山の紅葉夕日にはゆる様

殊に見所あり。  
(熟語) 副詞 名詞 動詞

12 (イ) 戦勝に酔ひし豪奢の餘弊と避け難き財政上の壓迫とは、ここに生活難の聲として青年の耳朶に響きぬ

名詞 助詞 副詞 動詞 助詞 動詞 助詞 副詞 助詞 名詞 助詞 助詞 名詞 助詞 動詞 助動詞 助動詞 助動詞  
潮がだんくさして来て何時の間にか洲が見えなくなつた。

(ロ) われわれは生れた以上、生きなければならぬ (十 廣高師)

(イ) 戦勝に酔ひし豪奢の餘弊と避け難き財政上の壓迫とは

副詞 名詞 助詞 名詞 助詞 名詞 助詞 名詞 助詞 動詞 助動詞  
ここに生活難の聲として青年の耳朶に響きぬ。

代名詞 助詞 動詞 助動詞 名詞 動詞 助動詞 助動詞 助動詞 助動詞  
(ロ) われわれは生れた以上生きなければならぬ。

13 神無月の時雨もすぎて日暖かなれば少し春ある心地すむべ此月を小春とぞいへるされど一日二日漸くかさなれば風氣いよくはけしく木葉ふりて山もあらはに見え残れる松も峯にさびし (昭二 東高師)

(昭二 東高師)

名詞 助詞 名詞 助詞 動詞 助詞 名詞 形容動詞 助詞 副詞 名詞 動詞 名詞 動詞 副詞 代名詞  
神無月の時雨もすぎて日暖かなれば少し春ある心地すむべ此  
名詞 助詞 名詞 助詞 動詞 助動詞 接續詞 助動詞 助動詞 助動詞 助動詞 助動詞 助動詞  
月を小春とぞいへるされど一日二日漸くかさなれば風氣いよく



形容詞名詞(熟語) 動詞助詞名詞助詞 副詞 動詞 動詞助動詞名詞助詞名詞助詞 形容詞  
 はけしく 木葉 ふりて 山も あらはに 見え 残れる 松も 峯に さびし。  
 『備考 品詞に數詞を設けない時は名詞とする。』

### (丙) 三、文章の解剖

1 春は花をめで秋は紅葉をあはれむ

主語 副修語 客語 述語 副修語 客語 述語  
 [われ等] 春は 花を めで 秋は 紅葉を あはれむ 單文

(大正元 女高師)

『備考 右の文の主語が省いてあるから補つて、括弧に入れて置いた。副修語とは副詞的修飾語の略稱である。客語と補語と合せて補語又は客語とする説もあるが、分けて置いた。』

2 去る者は追はず来る者は拒まず

主語 客語 述語 客語 述語  
 [われ] 去る者は 追はず 来る者は 拒まず 單文

(大正二 女高師)

3 高千穂の高ねおろしに草も木もなびきふしけむ大御代を今日しもあふぐ (大正三 東高師)

補語 形修句 主語 述語 客語 主語 副修語 述語  
 高千穂の高ねおろしに 草も木も なびきふしけむ 大御代を [われら] 今日しも あふぐ。 複文

『備考 形修句とは形容的修飾語の役目をする句のことである。即ちこゝでは「大御代」といふ客語を形容してゐるのである。句とはクローズのことで、主語と述語との結合があつて文の形を具へながら、大きな文の一部をなすものをいふ。之を節といふ學者もある。』

4 ましてさせる功無くして過分の望をいたすことみづからあやぶむるはしなれど前車の轍を見ることとはまことにありがたきならひなりかし (大正二 専檢)

副修語	副修句	形修句	主語	形修句	述語
まして	させる功	なくして	[彼等]	過分の望を	いたす
主語	主語	述語	主語	客語	述語
なれど	以上副修句				



主部 形修句部 主語 副修語 形修語 述部

〔人々〕前車の轍を 見る ことは 誠に ありがたき ならひかし

主語 客語 述語 述語 述語 述語

5 海面極めて静穩にして更に風波の憂あらず毫も船體の動搖を感ずることなし (十一女高)

主語 副修語 述語 副修語 主語 形修語 主語 述語

海面 極めて 静穩にして 更に 風波の憂 あらず 毫も 船體の動搖を感ずる こと なし

節 節 節 節 節 節 節 節

主部 形修語 主語 述語

重文

6 國歌「君が代」ヲ各成分ニ分解シ構造上ノ種類ヲ分テ (九女高師)

主語 副修語(まします)

君が代は 千代に八千代に さざれ石の いはほと なりて 苔の (それに) むすまで

主語 補語 述語 主語 補語 述語

7 (イ) 元朝の見る物にせん富士の山

節 節 節 節 節 節 節 節

副修語 主語 補語 述語 主語 補語 述語

重文

(ロ) 花の蔭あかの他人は無かりけり

(ハ) 百生も蔓一すぢの心より

(昭二 東商大専門部)

○主語 客語 補語 ○述語

(イ) 〔われ〕 富士の山を 元朝の見る物に せん

補語 ○主語 ○述語

單文

(ロ) 花の蔭 あかの他人は 無かりけり

○主語 補語 ○述語

單文

(ハ) 百生も 蔓一すぢの心より 〔生ず〕

○主語 補語 ○述語

單文

8 あめつちの神やかたためし萬代に立てゝ動かね國のみはしら

客部

○主語 形修語 客語 ○述語

あめつちの神や 萬代に立てゝ動かね 國のみはしらを かためし

9 (イ) 大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す

(ロ) 空の青く見えるのは空氣の中を日光が透る爲である

(ハ) 花の咲く春も近づいて來た

十五 廣高師



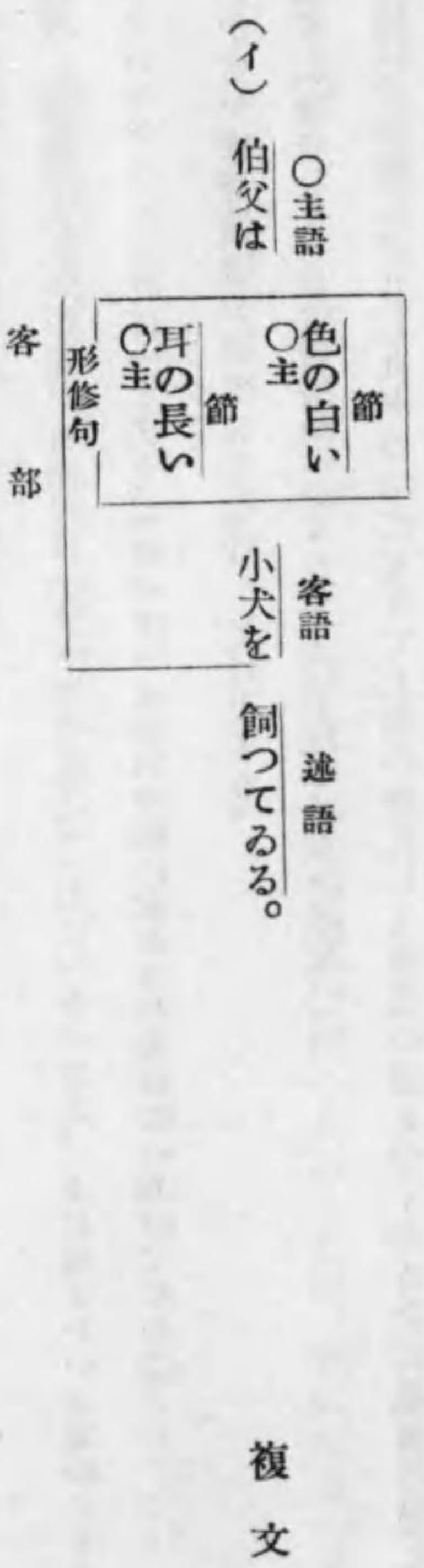
提示格語(客語) ○主語 客語 述語  
 (イ) 大日本帝國は 萬世一系の天皇 之を 統治す  
 ○主語 語 叙 述 句 單文  
 (ロ) 空の 青く 見える のは 空氣の中を 日光が 透る 爲である。  
 ○主語 副修語 述語 客語 ○主語 述語 複文  
 名詞句

右は述語の主要部が句から成り立つたので叙述句といふ。

○主部  
 形修句 主語 述語  
 (ハ) 花の咲く 春も 近づいて來た。  
 ○主語 複文

10 (ア) 古より徳高き人の富めるは稀なり  
 (イ) 伯父は色の白い耳の長い小犬を飼つてゐる  
 ○主語(名詞句) (昭二 廣高師)

主部  
 形修句 ○主語 述語 述語  
 (ア) 古より 徳高き 人の 富める は 稀なり。  
 副修語 複文



(丙) 四、正誤に關する問題(文字の誤をも)

- 紅葉はまだ散つてしまふようなことはないだらふ  
 散つてしまふやうなことはないだらう。  
 (大元 高師)
- 唯が君の成功を祝せざるものあらざらんや  
 (イ) 唯が君の成功を祝せざるものあらざらんや  
 (ロ) かくまでに國家に盡す人こそ有り難き  
 (ハ) 儉より奢に移ることは易く奢より儉に入ることは難し  
 (ニ) 若し少壯にして學ばざれば老ひて悔ゆれども及ぶことなかるべし  
 (大元 陸士)



(イ) 誰か……祝せざるものあらんや。

(ロ) こそ有り難けれ(係結)(ハ) 易く

(ニ) 若し少壯にして學ばずば老いて悔ゆとも及ぶことなかるべし。

(上に「若し」があるから、假定に云はねばならぬ)

3 そういふわけはなからうとももう (大正二 高師)

さういふわけはなからうとおもふ。

4 (イ) この陣地さへ落せば他は憂ふるに足らず

(ロ) 外國の事情に通ぜざる者いかに綿密なる軍備擴張の批評を爲し得んや (二 陸經)

この陣地だに落さば他は憂ふるに足らず

『備考』「陣地だけを」の意。口語では「さへ」文語では「だに」をつかふ。まだ落さない未定のことをいふのであるから、「落さば」とする。「落せば」は事柄の既に定まった場合にいふのである。』

『備考』「綿密なる」が軍備擴張にかゝるやうにとれるからいけない。』

『備考』「綿密なる」が軍備擴張にかゝるやうにとれるからいけない。』

『備考』「綿密なる」が軍備擴張にかゝるやうにとれるからいけない。』

5 己巳の年圖らざりし九洲の地に互りて工業の盛にして商業の衰えつゝあるを視概數に絶えず深く

(三 長崎高商)

自ら決せる所ありたり

己巳の年圖らざりき九洲の地に渡りて工業の盛にして商業の衰へつゝあるを視、慨數に堪へず深く自ら決する所あらんとは。

『備考』文の呼應で「圖らざりき」と上にあるときは、下に「何々とは」で受け應ずることになつてゐる。これはもと倒置した文章である。この例は在原業平の歌に

忘れては夢かと思ふ思ひきや

雪ふみわけて君と見んとは

とあるのと同じ型である。』百六頁参照

6 (イ) 君ニ對シテ至誠ヲ盡ス之ヲ忠トイヒテ人倫ノ大本ナリ

(ロ) 人若シ大業ヲ成サント欲スレバ堅忍不拔ノ志無カラザルベカラズ

(ハ) 淵ニ望ンデ魚ヲ美ムハ退ヒテ網ヲ結ブニ如カズ

(ニ) 歐洲ノ戦亂ハ千載一遇ノ慘禍ト謂フベシ

(ホ) 心誠ニ之レヲ求メバ成業ノ道豈ニ無カラザランヤ

(七 陸士)

(イ) 君に對して至誠を盡す之を忠といふ。これ人倫の大本なり。(下の主語がはつきりとし



ないからかう訂正する。)

(ロ) 人若し大業を成さんと欲せば堅忍不拔の志無かるべからず。(上に「若し」とあるから「欲すれば」では呼應がよくない。)

(ハ) 淵に臨んで魚を羨むは退いて網を結ぶに如かず。

(ニ) 歌洲の戦亂は實に空前の慘禍と謂ふべし。

『備考 「千載一遇」といふ語は望ましい嘉い、ことに用ゐるのである。』

(ホ) 心誠に之を求めば成業の道豈に無からんや。

7 (イ) 彼もし「死ねば玉と碎けて」といひし兄の勇敢なるに似れば死して名を成さん、もし又弟の如き卑怯ならば生きて辱を受くるべし

(ロ) 彼等のうち大雪に遭ひて飢へ且つ凍へたるもの多し

(七 海兵)

彼もし「死なば玉と碎けて」といひし兄の勇敢なるに似れば死して名を成さん。もし又弟の如く卑怯ならば生きて辱を受くべし。

『備考 「死ねば」といふと事柄がもう既にきまつたこと、こゝはまだ死んでゐない。「これから死ぬなら立派に」といふ意ゆゑ、「死なば」と訂正する。』

「もし……似れば」假定の呼應としてよくない。「似れば」は已然形についての「ば」で事柄の既にきまつた意である。それゆゑ「似ば」又「似たらば」と訂正する。

「弟のやうに卑怯であるなら」「弟のやうな卑怯者であるなら」のどちらかにする。それ故「如き」を「如く」と訂正する。』

『「べし」は終止形に接するきまりである。』

(ロ) 彼等のうちには大雪に遭ひて飢へ且つ凍へたるもの多し。

8 (イ) 天の道は満ちるをかきて足らざるを補ひ、地の道は盛なるを滅じて衰ふを扶けり

(ロ) 天地はとゞこをることをきろふが故に萬物を促してしばらくも止まらず

(ハ) 貧しきは常なり、富めるは常にあらず。これ富めるは集めるが爲にして集めるは物を滞らすがゆへなり

(大正七 廣島高師)

(イ) 天の道は満つるをかきて足らざるを補ひ、地の道は盛なるを滅して衰ふるを扶く

「満ちる」は口語、「衰ふ」は下二段の終止形ゆゑ「衰ふる」と連體形に改める。「扶け」は下二段ゆゑ、時の助動詞「り」につゞけてはいけない。「り」は四段、サへの外には接續しない。こゝは恒久時を用ゐる方がよい。定理・原則・眞理・諺・慣習・其他反復されるものは現在の時を用ゐる。



之を恆久時といふのである。「減じ」は「滅し」と訂正する。盛者必滅といふ熟語がある。

(ロ) 天地はとどこほることをきらふが故に萬物を促してしばらくも止まらしめず。

「萬物を促してその萬物を止らせない」といふ意で、天地は止らないのでなくて、止らせないのである。故に使役の助動詞を入れる。

(ハ) 貧しきは常なり、富めるは常にあらず。これ富は集むるが爲にして集むるは物を滞らするがゆゑなり。

「富んでゐるのがつゞくものでない」といふ意味ゆゑ、上は「富めるは常にあらず」とその儘にしてよいが、下の「富といふのは」といふ意味であるのを原文のやうに「富めるは集める」ではよくない。「集める」は口語ゆゑ文語に直す。「ゆへ」の假名遣の「へ」を「ゑ」と訂正する。「滞らする」の「する」は使役の助動詞の連體形である。

9

(イ) 功を急ぎ過ちするな

(ロ) 教ゆれど覺へず

(ハ) 飢うとも周の粟は食はじ

(ニ) 世のならばしこそはかなきものなり

(大正七 上田蠶絲專)

(イ) 「すな」と改める。禁止の「な」はラ變の外は終止形につく。(ロ) 教ふれど覺えず。教ふはハ行「覺ゆ」はヤ行いづれも下二段。(ハ) 誤が無い。(ニ) 上に「こそ」の係詞があるから、已然形で結ばねばならぬ。「なれ」と改める。「なり」は終止形である。

10

(イ) 容貌いかに美はしとも心さま正しからざれば眞の人とは謂はれまじ

(八 陸士)

(ロ) 音に聞へし壇の浦こそ源平二氏が最後の決戦を爲せし古蹟なり

(イ) 「美はしくとも」と直す。「とも」は形容詞では連用形につく。「うるはしくありとも」の「あり」を略したのである。

「正しからざれば」上に「いかに……とも」とあるから、ここも未定にいふ。「正しからずは」と訂正する。

「まじ」は、ラ變の外は終止形につく。「謂はるまじ」と直す。「る」は受身の助動詞の終止形である。「れ」は未然形である。「まじ」を未然形につける誤は鎌倉時代から出来て来たのである。

(ロ) 音に聞えし壇の浦こそ源平二氏が最後の決戦を爲しし古蹟なれ。

「聞ゆ」はヤ行の動詞。それゆゑ「へ」を「え」に直す。「爲せし」は文法上許容事項の一つになつてゐる。時の助動詞「し」は連用形につくのが正しいのである。「爲す」の連用形は「なし」



である。「なしし」が正しい。許容のものは正しいのを示し、許容のよしを云ふ方がよい。「なれ」と直したのは「こそ」の係結の関係である。

11 明日若し天氣あしければ遠足は順延と心えるべし

(八 東高師)

明日若し天氣あしくば遠足は順延と心得べし。

「若しあしくば」假定の呼應。「う」はエ、エ、ウ、ウル、ウレ、エとア行下二段活用である。「べし」その終止形「ウ」からつくきまりである。

12 (イ) 庭に植ゆる草木も伸びたるを抑えたを起しなどしてこそよき姿にはなるなりとき  
しかし

(ロ) 弓を射らんとするものは姿勢を正しふし一本の矢をもあだになせじと思ひて心をゆるむべからず

(八 廣専檢)

(イ) 庭に植ゆる草木も伸びたるを抑へ、たふれたるを起しなどしてこそよき姿にはなるなりときよき。

「植う」はワ行の動詞。「抑ふ」ハ行の動詞。「こそ」の係の結ぶところを誤つたのである。「庭に」から「なるなり」までは一つの纏つた文である。それを一つの名詞と見て「と」で受けたのである。

名詞といつたのは「と」は名詞を受ける性質の助詞であるからである。係結はその文の中で行はれるので、纏つた文を受けたところの「と」から下へは及ぼさないのである。

(ロ) 弓を射んとするものは姿勢を正しうし一本の矢をもあだになさじと思ひて心をゆるむべからず。

射は上一段活用で、その未然形は「イ」でそれから未來の助動詞「ん」につづくのである。「正しく」形容詞のう音便である。

「なす」は四段活用で未然形「ナサ」から助動詞「じ」につづく。「べからず」は終止形につく。「ゆるむ」は終止形「ゆるむる」は連體形である。

(八 水産講)

13 彼は上田に遊學の志あり

「上田に」とあるからその下は動詞があるべきである。それゆゑ、「遊學せんとする志あり」と直す。

14 (一) 汝が考ふ如く容易に破られまじ

(二) 吉田君と中島君の弟は同級生なり

(八 専檢)

(三) 若し御差支も候へば御一報なし下されたく候ふ

(一) 汝が考ふる如く容易に破らるまじ。



「如し」は連體形につく。「まじ」は終止形につく。

(二) 吉田君と中島君の弟とは同級生なり。

「と」は誤解を生ずる場合は、最終の語の下に於て省いてはならぬ。「吉田君と中島君と兩方の弟が同級生だ」といふ意ならば「吉田君と中島君との弟は同級生なり」とする。

(三) 若し御差支も候はば御一報なし下されたく候

「若し」とあるから「候へば」では呼應がよくない。「候」は慣例によつて「ふ」の假名を送らない。

15

(イ) 此の事は如何に處理して可なるべきや

(ロ) 下男に庭を掃除させ下女に縁を拭はす

(ハ) 花を咲かしむるも雨散らさしむるも亦雨ならずや

(ニ) 戊辰の際江戸市民をして兵火を免るるを得せしめしは勝安芳と西郷隆盛の力なり

(九 上田眞絲)

(イ) 此の事は如何に處理して可なるべきか。

疑問の語の下には「か」を用ゐるを正しとし「や」を許容とする。又「や」は終止形に接するを正しとし連體形につくを許容とする。「や」について二つの許容事項の含まれた問題である。

(ロ) 「掃除せさせ」を正しとし、「させ」を許容とする。

「掃除せ」といふサ變未然形に「さす」といふ使役の助動詞がついたのである。その「せ」が省かれて「さす」となり、許容されたのである。

(ハ) 花を咲かしむるも雨、散らしむるも亦雨ならずや。

「散らさしむ」は「散らす」といふ他動詞の使役で、

和尚は小僧に蓮の花を散らさしむ

といふやうなところに用ゐる。

(ニ) 免るるを得しめしは勝安芳と西郷隆盛との力なり。

「得しむ」と云ふところを「得せしむ」と云ふのは許容事項の第七で許容してゐる。誤解を生ずることの無い(右のやうな)場合に最後の「と」を省くことも、第十三で許容されてゐる。

16

(イ) 某氏は本年も入學試験を受けり

(ロ) 塵芥を捨つるべからず

(ハ) 辛ふじて思い出でたり

(イ) 某氏は本年も入學試験を受けたり。

(九 東高師)



時の助動詞「り」は四段の已然形、サ變の未然形に接し、その他の動詞に接しないから、「たり」と改める。百八頁参照。

(ロ) 塵芥を捨つべからず。

「べからず」はラ變は連體形、その他の動詞の終止形につく。

(ハ) 辛うして思ひ出でたり。

「辛くして」のう音便である。「思ひ」はハ行四段連用形で「出で」に結びついて熟語をつくつてゐる。かういふ時は送假名を省いてよいのである。

17

(イ) もし御意見も候へば御遠慮なく御申出下されべく候

(ロ) さきにはしばらくのがると見えしも末の露本の雫彼も是も終にはまぬがることなし

(九 外語)

(イ) もし御意見も候へば、御遠慮なく御申出下されべく候。

「候へば」は既に定まつたときにかふ。「べし」は終止形(ラ變は連體形)につく。「下され」は未然形又は連用形である。それゆゑ終止形「下され」に改める。

(ロ) 「のがると見えしも」と直す。「と」は終止形につく。「まぬがるることなし」とする。「まぬ

がる」は下二段の終止形である。ここは連體形でなくてはならぬ。「こと」といふ名詞につづいてゐる。

18

(イ) 生きとし生くるもの誰か其の生命を愛せざるものなからんや

(十 東高師)

(ロ) 昔の旅はさこそ不自由なりけんと思はるる

(イ) 生きとし生けるもの誰か其の生命を愛せざるものあらんや。生きてゐるものといふ意ゆる、生けると訂正する。「誰か」が反語であるから、原文の意では生命を愛しないものが無からうか否なあるといふことになる。

(ロ) 昔の旅はさこそ不自由なりけんと思はる。一文を纏めて受けた「と」の下へは係結は及ぼさない。係結をちやんと濟ませたところを受けるのが、右のやうな「と」の用例である。「けん」といふ過去推量の助動詞は

けん	〇	〇	ケン	ケン	ケメ	〇
----	---	---	----	----	----	---

右のやうに活用するから、「こそ」の結は已然形の「けめ」である。「思はるる」は連體形であるから、終止形に改める。



19 昔受けまじき罪をうけこの地に生を終りし人の裔今もなをあるやと尋ねればかたへに青さめる顔して立ちし一青年を指して彼こそそれと教へけれ  
(十 廣高師)  
昔受くまじき罪をうけ、この地に生を終へし人の裔今もなほありやと尋ねれば、かたへに青さめたる顔して立てる。一青年を指して彼こそそれと教へけり。

「まじ」はラ變の動詞以外は終止形をうく。「終はる」は自動詞ゆゑ他動詞に改める。上に「生を」とあるからである。「や」は終止形を受けるのが正しい。連體形に接するのは許容である。「青さめる」は「青さめてゐる」の意に用ゐたものと思ふ。「る」(時の「り」の連體形)は四段サ變以外にはつゞかない。ここは下二段「青さむ」の下ゆゑ「たり」をつかふ。「立ちし」は過去でいけない。今現在「立つてゐる」のである。「立てる」と改める。「彼こそそれなれ」結詞を略した轉結丙一(33)を見よ。「と」の下へは結が關係しない。「教へけり」と終止形で終るべきである。

20 父子相繼いで王事に死すその忠烈大に人を感じしむるものあり芳名の赫々として千載に傳はるもまた宜ならんや  
(大正十一 東高師)

父子相繼いで王事に死すその忠烈大に人を感じしむるものあり芳名の赫々として千載に傳はるもまた宜ならずや。

「繼いで」のイ音便。「感ず」は自動詞。上に「人を」とあるから使役にいふ。「感ず」に他動詞が無いから使役にいふのである。「芳名の」とあるから下は自動詞「傳はる」と改める。「宜ならんや」では「もつともであらうか、否な尤でない」といふ意になるから、「宜ならずや」と訂正する。「や」は反語である。

21 (イ) 況んや専門の學徒皆講學の念切なるものあるに於ておや  
(ロ) 君に事を親に仕ふ  
(十二 商大豫科)

(イ) 況んや専門の學徒皆講學の念切なるものあるに於てをや。  
(ロ) 君に仕へ親に事ふ。

「仕」は仕官する、役についてつかへる字義である。「事」は奉仕する意である。精神をいふ。仕官するのではない。

22 (イ) 家亡べども恨みんともせず國衰へども悲しむことを知らず歎すべきかな  
(ロ) 實戦に臨んでは一發の彈丸たりともあだにせまじと心がけるべし  
(ハ) みだりに入場を禁ず  
(十二 陸士)  
(イ) 家亡ぶれども恨みんともせず國衰ふれども悲しむことを知らず嘆すべきかな。



「ども」は已然形につく。嘆はなげく意、歎はほめる意にもなげく意にも用ゐられる。

(ロ) あだにすまじと心がくべし。

「まじ」「べし」推量の助動詞は終止形につく。

(ハ) みだりに入場するを禁す。

原文ではみだりに禁する意味にとれる。

23 (イ) 心を正しふす

(ロ) 山を越へて行く

(ハ) 人の死す時その言やよし

(ニ) 塵積りて山をなす

(ホ) 獸にもいかで劣るべし

(大正十二 女高師)

(イ) 心を正しうす、う音便。(ロ) 山を越えて行く、ヤ行の動詞。(ハ) 人の死する時その言やよし。「死する」サ變連體形。「言や」の「や」は感動助詞ゆゑ結に關係がない。(ニ) 塵積りて山となる。自動他動の呼應である。前篇「三十四」を見よ。「山をなす」では上をば「塵を積みて」とすればよろしい。(ホ) 「劣るべき」とする。「いかで」といふ疑問反語の呼應と見て

よゝ連體形で應ずるのである。

24 この川に沿ふて行けば寺の前に出ずべしその隣の家ぞ君の訪ねる家なりと教へたる。

十二 早稻田高

この川に沿うて行かば寺の前に出づべしその隣の家ぞ君の訪ねる家なりと教へたり。

「沿うて」は「沿ひて」の音便。「行けば」は下に「出づべし」がある。今から行かうとするところであるから、「行かば」と改める。「ぞ」の結は「と」の上で済みます。「家ぞ」の主語に對して「家なる」ここが結である。「教へたり」と終止形に改める。これには係がないのである。

25 年を経るといへども字面なほ鮮にしてこれを拂拭するも容易に消ふることなし (十三 東高師)  
年を経といへども字面なほ鮮にしてこれを拂拭すれども容易に消ゆることなし。

「と」は終止形を受ける。經の活用は、

ふ	へ	へ	フ	フル	フレ	へ
---	---	---	---	----	----	---

「得」と同じく一音の動詞(下二段活用)で、その終止形は右の通「フ」である。

「も」は誤解を生じない場合は「トモ」又は「ドモ」のやうに用ゐてよい(許容第十五)ここは「ド



「モ」の意に用ゐたので、強ひて訂正するにも及ばぬが、正しい方をいふと「拂拭すれども」である。

26 不都合の事なきやうころえべし  
不都合の事なきやうころうべし。

(十三 東南大隈)

未來や決意のときは「やう」様のときは「やう」「べし」は終止形につく。得の活用は

う(得)	エ	エ	ウ	ウル	ウレ	エ
------	---	---	---	----	----	---

で終止形は「ウ」である。

27 (イ) 仰るで天にはぢづ俯して人にはじす

(ロ) 水を飲むで源を思ふは人情なり

(ハ) 三郎さんを連れてお晝前にらつしやい面白い事をして遊びましやう (十四 東高師)

(イ) 仰いで天にはぢづ俯して人にはぢす。

「仰きて」のイ音便。「恥ぢ」はタ行の動詞。口語「ナイ」にあたる打消の助動詞の文語は「す」である。

(ロ) 水を飲んで源を思ふは人情なり。

「水を飲みて」の撥音便。「思ふ」はハ行四段の連體形で「思ふコトは」の意である。(ハ)「いらつしやい」「入らせられい」の變つた語。ませう。

(イ) 若シ差支無ケレバ明日來ヨ

(ロ) 用意ハ整フタノニ會ハマダ始マラ無イ

(ハ) 彼ノ女ニハ此ノ本ハ讀メジ

(ニ) ツツシムデ命ヲ全フスベシ

(ホ) コノ繪ハ某ノ名工ノ寫セシモノト言ヒ傳ヘリ

(ヘ) 出デ迎フ人停車場ニ滿チタリ

(ト) 雨ガハレタラ出カケヤウ

(イ) 「無クバ」と改める。「若し」「明日」二つとも未然の副詞がある。それゆゑ未然形「無ク」に「ば」をつける。

(ロ) 用意ハ整ツタノニ會ハマダ始マラナイ。

「整ウタ」とウ音便に言ふのは關西語で、關東語は促音便に云ふ。そしてそれが標準語となつ



てゐる。打消の助動詞つまり動詞の下に結びつくときは假名で書く。

(ハ) 彼ノ女ニハ此ノ本ハ讀マレジ

「讀メ」は下一段に活用して可能の意味の含んだ口語の動詞である。「ジ」は文語であるから、文語可能の「ル」の未然形を用ゐる。

(ニ) ツツシンデ命ヲ全ウスベシ。

「ツツシミテ」の撥音便である。「ミ」(三)の母音iが落ちてmとなり、mがnになつた。それゆゑ「ン」と書く。「全ク」のウ音便 $\text{ク}$ の子音kが落ちたのである。

『註 Kを父音といふのは舊式で、今は通用しない。子音である。 $\text{ク}$ はシラブル(音節)である。』

(ホ) コノ繪ハ某ノ名工ノ寫シシモノト言ヒ傳ヘタリ。

「寫セシ」は許容第八。サ行四段連用形「シ」から過去の「シ」につゞくのを正しとする。「リ」は四段サ變の外は連続しない。「傳ヘ」は下二段ゆゑ「タリ」と直す。

(ヘ) 出デ迎フル人停車場ニ滿チタリ。

「迎フル」ハ行下二段連體形である。「迎フ」は終止形で體言「人」につゞけるのは誤である。

(ト) 雨ガハレタラ出カケヨウ

未來の助動詞で上一段・下一段・カ變・サ變の未然形に接するのは「ヨウ」と書くきまりである。

29 (イ) 舊幕時代なればいざ知らず

(ロ) 美は雨に打たれ風は散らして跡無し

(イ) 舊幕時代なればいざ知らず。

舊幕時代でない時に、無い事を假定した言ひ方であるから、「ならば」とする。「いざ」は「サア」「ドレ」の意。「知らず」の上に置く副詞は「いざ」と「さ」をすむのである。「人はいざ心も知らずふる里は花ぞむかしの香ににほひける」といふ貫之の歌がある。(ロ) 美は雨に打たれ風に散らされて跡なし。上に「美は」といふ主語に應ずるためである。

30

塵積りて山をなすてう諺もあればたとえ些細と思はるものなりともみだりに捨てべからず  
(十五 東高師)

(傍線ヲ引ケル語ノ活用表ヲツクレ)

塵積りて山となるてふ諺もあればたとへ些細と思はるものなりともみだりに捨てべからず。

「てふ」は「といふ」の約つたのである。「たとへ」はハ行下二段の連用形から副詞となつた語。「思はる」の「る」は受身の助動詞の終止形ゆる連體形に改める。「べからず」は終止形を受けるから「捨て」と直す。「塵積りて山となる」について二十二頁を見よ。



積り	ラ	リ	ル	ル	レ	レ
なす	サ	シ	ス	ス	セ	セ
あれ	ラ	リ	リ	ル	レ	レ
思は	ハ	ヒ	フ	フ	ヘ	ヘ
る	レ	レ	ル	ル	ル	レ
なり	ラ	リ	リ	ル	レ	レ
捨て	テ	テ	ツ	ツ	ツ	テ
ず	ズ	ズ	ズ	ヌ	ネ	〇

31

(イ) 任重ふして負擔に堪えざるが如けれども決して然らず  
 (ロ) 若し食盡くれば砂を嚼むでも進まむ  
 (ハ) かう早くは書き上げらるまいと思つたでしょう  
 (イ) 任重うして負擔に堪へざるが如く<sup>なれども</sup>決して然らず。  
 「重く」のう音便。「堪へ」はハ行下二段未然形。「如し」に已然形の活用が無い。

十五 廣高師

(ロ) 若し食盡きなば砂を嚼んでも進まむ。

ここは未然の言ひ方をしなければならぬ。上に「若し」といふ副詞があるからである。それゆゑ「盡き」といふ未然形に「ば」をつけて、「盡きば」としてよい。但し口調がわるいから、完了「ぬ」の未然形「な」を入れて「盡きなば」とした。

「嚼みて」の撥音便は「ん」である。未來の助動詞は「ん」でも又「む」でもよい。

(ハ) かう早くは書き上げられまいと思つたでせう。

「まし」は四段及同系の語の終止形に、その他の語の未然形に接する。「られる」口語可能の助動詞は下一段系の語であるから、未然形「られ」につく。

られる	ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレレ	ラレ
-----	----	----	-----	-----	-----	----

「テズ」は次の通活用する。その未然形が「ウ」について出來た現在推量の助動詞である。

です	デセ(ウ)	デシ(タ)	デス
----	-------	-------	----

32 (イ) 好い文體を作らふと思ふものは宜しく甲からも乙からも丙からも探つて更に新しきものを案出するがいゝ斯うした誤つた意見を正そうとしてレミッドグウルモンの文體論が出た



(ロ) 甲問ふて曰く人生とは如何乙答へて曰く畢竟人生は喜びの中の涙であり涙の中の喜びであるとも言へやう  
(十五 東商大豫)

(イ) 好い文體を作らうと思ふものは宜しく甲からも乙からも丙からも採つて更に新しいものを案出するがよい斯う誤つた意見を正さうとしてレミッドグウルモンの文體論が出た。

(ロ) 甲問うて曰く人生とは如何乙答へて曰く畢竟人生は喜の中の涙であり涙の中の喜であるとも言へよう。

(イ) 新年を迎ふと共に一年の計を立つを忘るゝべからず

(ロ) 悲しむだり喜むだり泣いたり笑ふたりするのは浮世の常であらう

(昭二 廣高師)

(イ) 新年を迎ふると共に一年の計を立つるを忘るべからず。

終止形を受ける「と」は受けとめる場合である。この「と」は並列の用をなすもので、名詞の下につくのが本性である。随つて連體形の下に名詞「トキ」「コト」を略したと見る。故に連體形をうけるのである。「一五二」(百二十一頁)を見よ。

(ロ) 悲しんだり喜んだり泣いたり笑つたりするのは浮世の常であらう。

音便の假名遣を誤つた例である。「笑うたり」と關西でいふが、やはり「笑つたり」の方が標準語である。

(終)

昭和六年九月十五日印刷  
昭和六年九月二十日發行

國文法概説  
定價壹圓五拾錢

著作者

田中健三

發行者

東京市京橋區銀座西二ノ一  
立命館出版部  
竹上孝太郎

印刷者

東京市京橋區京橋二ノ十三  
佐々木恒太郎

東京印刷株式會社印刷  
小製本所製本



發行所 東京市京橋區  
銀座西二ノ一

立命館出版部

電話京橋 五六〇六番  
振替東京 七五三六二番



生田 蝶介著 **作歌入門**

本書は平易に短歌の作法について餘す所なく詳解し作歌の参考書として完璧を期してゐる

價一、五〇  
送料一〇

生田 蝶介著 **紀行旅に歌ふ**

作歌の實際について其神髓を示す、すぐれたる紀行文集である

價一、八〇  
送料一〇

生田 蝶介著 **短歌文法七十講**

古今数千の歌例により短歌の眞諦を悟るに緊要なる文法を明解し助動詞接尾語副詞につき詳細なる研究を遂げてゐる等全く他に類を見ず初學者の好著である

價二、二〇  
送料一〇

生田 蝶介著 **短歌用語小辭典**

和歌の詞の内容、蔭影、ひびきを知らぬことは短歌のあらゆる用語を詳述し古今数千の歌例を引きて其の意味内容を詳述し明解してゐる

價二、二〇  
送料一〇

生田 蝶介編 **昭代一萬歌集**

萬葉以來最も盛なる現代に於て規準となるべき和歌集なきは甚だ遺憾である。本書は明治より現代迄の遍く全国の歌壇より其の粹を求めて昭代の萬葉といふべき和歌の寶鑑をなしてゐる。集むる珠玉一萬一千、作者索引完備

價二、四〇  
税一八

生田 蝶介著 **百人一首の講義**

歌の意味内容をわかりやすく講ずると共に、作者の小傳、その歌を中心として其の興味多い物語等を面白く描き出してゐる。又「ことば」の意味内容を面白く描き出してゐる。又「ことば」添へてゐる。

價一、五〇  
税一二

鷹取 岳陽著 **漢詩入門**

斯界の著者鷹取岳陽氏の蘊蓄を傾けたる近來の快著。平易なる言葉で漢詩の作法を説き、其の全般に亘りて完璧の境地をなす。本書の特色である。しかも著者の獨特の興味ある文を以てして一讀漢詩作法の妙諦を得せしむ。附録として諸作例、参考便覽諸表を掲げて作者の便に供す。

價二、二〇  
送料一二

生田 蝶介著 **作歌入門**

本書は平易に和歌の作法に就て餘す處なく詳解し和歌の歴史を語り和歌の精神を解明して居り初學者の絶好の参考書として作られたものである 第八版出来

價一、五〇  
税一〇

中 富 院 有 著 **文章入門**

文章には講演や談話と非常に異つた獨特の効果をもち居り荷も之を要する。本書は多くの文章的知見と洗練とを要する。本書は文章の進化、理論、技巧、論述に必須の知識を與へてゐる。現代の文章述に必須の知識を與へ

價一、五〇  
送料一〇



吉澤則著 **國語史概説**

本書は國語學の一部門としてその歴史的研究の方面を支持つた我國最初の研究書にして國語の現代に於ける法の上の如何なる變遷を経て現代に至れるかを明かにしたものである。近世の發達——東西二大方言の競争——概括して、

價 一、五〇  
税 一〇

吉澤則撰 **徒然草** 諸大抄

古來幾多の諸抄により異説多く解説多岐に分れ是非定まらず今諸抄大成により、現代の諸説をも網羅して正解の最後のものたる義の最高權威あり解釋の最後のものたるを斷言す。全五分冊

價 各 一圓  
税 八

田中健三著 **國語國文法の理論と演習**

著者多年の蘊蓄を傾倒し教授の實際を基礎として高専諸學校の教科用、參考用として編纂せられたもの。特に文部省檢定試驗（中等教員）受験者として用ゐるに稀に見る好著である。繁雜より平易に而も其の周到なることは本書の特色にして中等教授參考用、小教檢定受験用としても絶大なる價値を認む。

價 一、八〇  
税 一〇

田中健三著

新刊

**國語國文法の理論と演習**

四上定送  
六 價  
版製壹料  
三 圓  
九美八十  
〇 拾  
頁本錢

- 一、本書は著者多年の教育の實際を基調として、高等學校、專門學校學生の教科書若しくは參考書として編纂せられたものであるが特に文部省檢定試驗（中等教員）受験者の準備用參考書として稀に見るの好著である。
- 一、著者の蘊蓄を平易に且つ周到に傾倒したる本書は、中等學校文法教授參考用としても高専學校入學準備用としても、小學校教員檢定受験用としても絶大なる價値を認む。
- 一、本書は理論と演習との聯絡を合理化し、引例演習題は廣く深く各時代各種の文より採り特に語の連續や、口語法を詳述し、文語法との比較は、語及び語法の消滅と發生との方面より著眼してゐる。
- 一、附録として文檢の問題を類別して掲げ又高專入學試験問題は最近問題の傾向を知るべく、昭和二年以前と以後とに分けて類別して掲げてある。



文學博士 吉澤義則著

# 國語說鈴

菊版五百八十八頁  
定價參圓八拾錢  
送料貳拾錢

新刊

## 次 目

布留乃能、禪僧所作の謠曲、寛延歌海の小波瀾、我が國に於ける學庸朱註の二分流、  
鍋島窯の瓷器、仁清の色繪附から、藤貞幹に局いて、新春語、地獄ノ鬼、井々竹添先  
生遺愛唐鈔漢書楊雄傳訓點、東西兩京の言葉戦ひ、明治初年に於ける京都出版書目、  
濁點源流考、假名交り文の起源、王朝時代に於ける博士家使用ヲコト點譜、語脈より  
觀たる日本文學、明治の初期に於ける韻案劇二つ、萬葉集一面觀、語法の任務に就い  
て、尙書卷第七洪範第六古訓、貫之の考へてゐた和歌の本質について、萬葉時代に於  
ける梅花の賞鑑、古今傳授の意義、魯文關係書目稿、正倉院御物古裂類陳列を拜觀し  
て、萬葉歌人の國語意識、百人一首雜談

東京市京橋區 立命館出版部 振替 三五七 東京 二六番



終

